

2018年10月1日

信徒の皆様へ

世界救世教いづのめ教団
対策本部事務局

はじめに

世界救世教いづのめ教団は、現在未曾有の浄化の中にあります。過去の教団浄化と大きく異なるのは、その浄化の渦中に四代教主岡田陽一氏がいることです。

(岡田陽一氏は現在、教主推戴を取り消されているが、当内部資料では、取り消し以前の経過を説明するため便宜的に「四代教主様」「四代様」と表記する)。

2017年12月22日のご生誕祭を境に、四代様は被包括法人主之光教団やいづのめ教団の教主派と称する信徒の上に立たれ、自らの立場を鮮明にされました。その後、四代様率いるいづのめ教団反体制派は主之光教団との連携を深める一方で、いづのめ教団体制派や被包括法人東方之光との対立を強めています。

こうした状況下、2018年1月30日、包括法人世界救世教は主之光教団に対し、世界救世教の規則・教規に著しい違反行為があったとして、包括・被包括関係の廃止を決定しました。その最大の理由は、主之光教団が世界救世教教規第4条に定めた教義を遵守せず、教義の根幹に抵触する恐れのある四代様の異説を、包括での議論を経ることなく、平成30年の教団方針とし、「御教えの神髄をお取次ぎくださる教主様のご教導を唯一絶対無二の拠り所」「教主様のお姿とお言葉に倣うことを徹底する」ことを以って、「全く新しい信仰」を進めていくことを信徒、専従者に宣言したことでした(詳細は平成30年1月30日付世界救世教責任役員会：「信徒の皆様へ」の通達文書参照)。この宣言は、主之光教団が明主様と四代様を同等に位置づけ、その教導を新しい教義として仰ぐ、全く新しい集団の出発を宣言したに等しい行為でした。

包括法人世界救世教及び当教団においては、明主様の御心を求め、御教えに基づいて、真に明主様のご経綸に叶う教団を目指してまいりました。従って、包括役員会は、主之光教団の教義や規則に背く一連の違反行為を深く憂慮し、重ねて是正を求めてきましたが、主之光教団はそれらを見做し、その姿勢をさらに強固なものにしました。包括役員会は、主之光教団のこうした違反行為を到底看過できない深刻な事態と判断し、当該教団との包括・被包括関係の廃止を決定しました。この決定を受けた主之光教団や四代様とその率いるいづのめ

教団反体制派の言動は一層尖鋭化し、明主様の御教えとは相容れない異説の流布・拡大をエスカレートさせています。

一方、包括役員会は、四代様に対しても、信者統合の「象徴の座」「教主の座」を汚すことのないように、教義上の違反行為や教団運営に介入するなどといった法律違反や教規・規則違反等を謹んで頂くよう再三に渡って要請してまいりました。しかしながら、四代様はこうした要請を悉く無視し、上記違反行為を繰り返されてきました。これに追い討ちをかけるように、四代様と同夫人が過去に起こした人権問題が表面化し、教団に激震が走りました。

包括役員会は、異説を唱える四代様の重大な教義違反行為、象徴教主としての職務を超えた被包括法人への不当な介入行為、包括法人役員や被包括法人代表役員の見証行為の拒否等々、四代様の「象徴の座」や「教主の座」に相応しくない度重なる違反行為が、世界救世教の根幹である明主様のご神格や御教え、そして教団の存在意義やその在り方までも根底から覆ってしまう恐れがあること、延いては、信徒や一般社会に大きな動揺と混乱をもたらす、教団を揺るがす大騒動に発展する可能性があるとの判断に至りました。包括役員会は、世界救世教がこの深刻な事態から一日も早く脱却し、真に明主様に帰一する教団に甦るためにも、教団の秩序回復に全力を傾注すべきだと決断致しました。明主様のご経綸に叶う教団づくりには、今一度明主様のご立教の原点に立ち返り、明主様に帰一する信仰を深め、専信一体となって御教えやご事績に求め、学んでいくことが、絶対不可欠です。その実現のためにも、四代様に教主の座を退いて頂く以外に選択肢はないと判断致しました。

その結果、2018年6月22日、包括役員会は全会一致で、四代様の教主推戴を取り消す苦渋の決定を致しました。(詳細は平成30年6月24日付世界救世教：信徒の皆様へ～岡田陽一様に教主を退いていただく決定のお知らせ～及び大経綸19号を参照)。この決定は、教団の歴史上、未曾有の出来事で、極めて遺憾なことであります。私たちは、このような事態に至ったことを重く受けとめ、明主様に、そして信徒の皆様にご心からお詫び申し上げます。

今回の事態に至った原因や理由、経緯を検証

翻って今回の事態を考えてみますと、教団には未だ明主様帰一の信仰が確立していなかったことを痛感せざるを得ません。私たちは、明主様に、そして信徒の皆様にご心からお詫びしなければならないことは、このことだと思っています。だからこそ、私たちは、今回の事態を直視し、反省の上に立って、再出発し、新たな教団建設に向けた取り組みを進めなければならないと考えていま

す。そのためには、今回の事態に至った原因や理由、経緯を具体的に検証し、真に明主様に帰一する教団づくりを成し遂げるための解決の糸口を見出す必要があります。本資料は、そのために作成されたものであります。

そもそも今回の浄化には、2つの主要な要因が発端にあると思われます。一つは、メシヤ降誕時における明主様の「メシヤが生まれた」「生まれ変わるのではない」「新しく生まれた」と発せられたお言葉に対し、四代様が「古い信仰」「新しい信仰」という新しい独自の解釈を出され、それが「新しい明主様の新しい御教えは、四代様のみが聞き、伝えることができる」との主張に発展してきたことです。

もう一つは、いつのめ教団は発足当初より一貫して「教主中心の神業体制の確立」を目指してきましたが、いつの間にか「教主中心」という極めてあやふやな言葉だけが独り歩きを始め、「教主様のご意向には無条件で従わなければならない」という誤った解釈が流布・拡大してきたことです。これらの要因が、四代様のお言葉を正当化・権威化させ、独自のメシヤ観や浄霊観等を生み出し、明主様のご神格や御教え、浄霊の否定へと発展し、それらが教団の混乱に拍車をかけてきたと考えられます。

3つのグループに分断、一方的な情報

こうした状況下において、現在、世界救世教の信徒は大きく3つのグループに分断されていると思われます。

第一のグループは、これまで通り、明主様を信じ、明主様中心の信仰を目指している体制派と呼ばれる人達です。

第二グループは、四代様率いる反体制派と称する人達。このグループはさらに二つのサブグループに分けられると思われます。即ち、

①従来通りの明主様中心の信仰・御教えがあると信じた上で、四代様の教導に従っている人達。つまり、この人達は、従来の明主様の御教えにあるお導きも、献金も、浄霊も、徳積みも、利他行も今も何ら変わることはないと思われているグループ、

②明主様が説かれた教えを捨て去り、ひたすら四代様のお言葉に明主様の御意志が示されると信じ、教主様中心の信仰に邁進している人達のグループです。

第三のグループは、明主様中心の信仰・御教えは信じているが、「象徴の座」「教主の座」「明主様の血縁」にある教主に対する特別な思い・畏敬の念から、四代様のお言葉を否定できないで、苦悩の中（水面下）にいる人達です。

これらのグループの中で、第二の①のサブグループと第三のグループの人達は、過去布教現場が教主派の専従者や信徒達によって運営され、教主派（反体制派）の情報のみが信徒に

流されていた状況があり、そのため体制派から発信される通達文などは正規のルートでは信徒の手元にほとんど届かないような情報統制下にありました。従って、これらのグループの人達の中には、正確な情報が無い中で止むを得ず教主派に属している人達も少なからずいらっしゃると思われます。

明主様の御教えと四代教主のお言葉の違いを客観的に検証

世界救世教は、宗教法人法によって文部科学大臣に認承された宗教法人です。従って、教団は、公益性のある社会的存在として社会貢献することが求められています。最近、23年前に起こった地下鉄サリン事件や松本サリン事件などで有罪とされたオウム真理教の幹部13人が処刑されました。多くの人達は当時の記憶を呼び起こされ、カルト的組織に対する懸念や脅威を再認識しています。

それだけに、一般社会の宗教団体を見る目は一段と厳しくなっています。きわめて重い「教主の座」におられる四代様が、宗教法人法や規則・教規に抵触する恐れのある言動により、包括法人から教主推戴を取り消されたという事態に対して、教団関係者はもとより、一般社会の人達も大きな懸念を抱いていることは想像に難くありません。世界救世教の専従者や信徒を含むすべての関係者は、社会から不審の目で見られたり、混乱や誤解を招いたりすることがないように、一日も早く今の教団の混乱を収束させ、教団を正常化する必要があります。

今、信徒には、明主様を一途に求め続けるのか、教主様中心の新しい信仰を選ぶのか、一人ひとりが真剣に判断しなければならない時期にきていると思われます。こうした人達が自らの判断でいずれかを選択するためには、体制派、反体制派の両者の情報を公正に提供する必要があります。そのために、信徒が互いに情報を共有し、同じ認識の上に立って、冷静な議論を重ね、迅速に融和を図ることが必要と考えます。仮に、明主様の御教えと四代様のお言葉との間の乖離や齟齬が今日の教団の大きな混乱の核心であるのであれば、その要因となった四代様のお言葉や主張を、明主様の御教えと対比させ、どこの何に対して齟齬や乖離・矛盾があり、どのような異質性があるのか等々を、根拠資料をもとに客観的に検証し、冷静沈着に問題解決にあたる必要があります。

感情論・情緒論でいくら議論しても不毛な水かけ論に終わってしまいます。本資料では、明主様の御教え（原典、教典、岡田茂吉全集など）と、これまでに集めた四代様およびその意を汲んだ岡田真明氏のお言葉・発言を、根拠資料として対比させ、両者間の齟齬や乖離・矛盾等について客観的な検証を行い、両者の相違を正しく理解し、その上で世界救世教いつのめ教団対策本部事務局

としての見解を述べるものです。

冷静沈着な判断を

日本国憲法は、個人の思想や信教の自由は国民の権利としてこれを保障しています。信徒の皆さんがいずれの派に属されても、それは自由です。ただ、多くの信徒は何らかのキッカケで明主様にご縁を頂かれ、救世教に入信されたと思います。どうか、各人が入信された時の原点に立ち戻って、冷静沈着な判断をされるよう切に願っています。

本資料を読まれるにあたって、私たちが共有しておくべき共通認識について以下に述べさせていただきます。これらは、御教えと四代様とその意を汲んだ真明氏の言葉・主張を正しく理解し、冷静かつ客観的に問題の本質を見極めるために必要不可欠の共通認識だと考えます。

- 1・日本国憲法は、思想の自由、集会・結社・表現の自由、信教の自由は、国民の権利としてこれを持つことを保障しています。しかし、組織の長に在る者は、その組織の枠内にある、という制約がつきます。とりわけ、公益性をもつ宗教法人の長、つまり「教主の座」「象徴の座」、に在る者は、その宗教組織の枠内という制約があり、自らの宗教組織とは異なる他の宗教を信仰したり、信者となること、自らの宗教組織の教義を原典・教典に基づかないで、独断で勝手に廃止・変更することは許されません。
- 2・世界救世教規則第3条は、「この教団は、岡田茂吉を教祖と仰ぎ、その垂訓を最高神の啓示と信じ、その立教の本義に基づき、教義をひろめ、儀式行事を行い、信者を教化育成して、世界の人類を救済し、地上天国を建設する使命を有し、宗教団体を包括し、その他この教団の目的を達成するために必要な業務及び事業を行う」と定めています。
- 3・世界救世教教規第4条2項には、世界救世教の教義は、世界救世教の原典に基づき世界救世教で編纂した教え（注：天国の礎4編6冊）であることが述べられています。
- 4・世界救世教規則第5条第1項には、「教主は、教祖の聖業を継承し、教義に基づき世界救世教を統一する。」第2項には、「教主は、信者統合の象徴とする。」第11条には、教主は、教規に基づき管長、理事、被包括宗教団体の代表役員及び代表役員たる者の選任を承認する者を認証することが記されています。
- 5・教主様が特別であるのは、①教祖の聖業を継承し、教義に基づき世界救世教を統一する責務を果たすべき「教主の座」にあつて、世界救世教教規に定められているご神業（教規第7条～17条）、即ち、(1)御神体及びお光りを授

与する、(2)祭儀を司る、(3)教義、祭儀及び聖地建設の大綱を定める、(4)被包括宗教団体からの上申に基づき、教師資格の認証などを行う、(5)管長、理事、被包括宗教団体の代表役員及び代表役員たる者の選任を承認する者を認証する、(6)規則、教規及び宗家規定の変更の承認、(7)聖地の処分の承認、(8)世界救世教の合併又は解散の承認、を行う等の権能と職責を有されているからです。つまり、教主様は、「ご神業にあたって、明主様と信徒の中間に立たれ、上からはご神意をお取次ぎ下さり、下からは信徒の信仰の誠をお受けになり、どこまでも明主様に真向かわれている純粋なお立場におられる」からこそ、特別なのです。②教主は、宗教法人世界救世教規則第5条第2項および教規第5条第2項により「信者統合の象徴」とされているからです。「象徴」という意味は、天皇陛下が「日本国及び日本国民統合の象徴」として「日本国憲法に定める国事を行う」という例を挙げるまでもなく、「信者統合の象徴」である教主は、世界救世教教規第7条か第18条によって定められた宗教行為のみを行うよう明確に定められております。つまり、教主は、この教規に定める宗教行為以外の教団の管理運営等に関する権能を有しておりません。教主は、教規第9条で教義、祭儀及び聖地建設の大綱を定める権能を有していますが、その権能を行使する際には、教規第4条に規定されている範囲の中で行わなくてはなりません。また、教主は、被包括法人から上申された教師資格の認証や管長、理事、被包括法人の代表役員及び代表役員たる者の選任を承認する者の認証を拒否できないことになっているのです。法令順守、教団の規則・教規の順守は、公益性のある宗教法人のトップである教主には特に強く求められるものなのです。世界救世教は、「明主様の権威」「御教え」「浄霊（救いの3本柱）」で確立された世界です。すなわち、このいずれか一つでも欠ければ、世界救世教は成り立ちません。

- 6・明主様が「メシヤ」と言う言葉が使われた理由：

明主様は、メシヤという言葉が使われた理由について、「神の啓示によって『救世教』の名を授かったが、漢字であると東洋に限られるから、どうしても全人類を救うにはそれに相応するような意味を表さなければならない、それが為に救世に「メシヤ」のフリ仮名を付けた。従って、メシヤとは救世の意味だけであつて、今後の活動に適合するためのもので他に意味はないので、其の事を茲に断っておくのである。人によってはキリスト教に関係のある名称だから、時局便乗主義からと思うかも知れないが、そういう点は些かもないのである」（岡田茂吉全集著述篇第8巻369頁）と「メシヤ」の言葉の意味を明確に説明されています。

以上

【「教主」および「教主の座」について】

明主様のご神書(御教え・教典・岡田茂吉全集)	四代教主様のお言葉	いつのめ教団対策本部事務局としての見解と根拠
<p>『御教えの要旨』 ①明主様が「教主」または「教主の座」について説かれている御教えは、明主様のご神書の何処にも存在しません。 ②しかし、外部の有識者、マスコミ関係者等との対談(根拠資料1～5)において、明主様は「ご昇天後も、霊界からお光の力(観音力)を働かせるので、現界におけるご経綸に何ら変わることはない」との趣旨の発言があります。(根拠資料1～5)</p> <p>『根拠資料』 1. 昭和27年10月22日(「栄光」179号)読売新聞社科学部次長為郷恒淳(いざとつねあつ)氏との対談: 明主様「私のお腹に光の玉があって、それから光が出るのですから無限なのです。」 為郷氏「その玉というのは、明主様だけがお持ちになっておられるのですか。」 明主様「そうです。」 為郷氏「そう致しますと仮に明主様が百年の後に霊界にお入りになりますと無いことになります--。」 明主様「しかし<u>霊界から出しますから同じことです。かえってよく出ます。体があると邪魔になりますから。</u>」</p> <p>2. 昭和29年7月28日(「栄光」267号、岡田茂吉全集講話篇 第11巻377ページ)アジアシーン東京特派員 ディック・中村氏、ラジオ東京アナウンサー真山照政氏との対談: 真山氏「教祖の“光”というのは、世界的には教祖お一人ということになるのですか」 明主様「そうです。昔からないのです。人類始まって以来初めてです。」 真山氏「しかし教祖がなくなると、後、救世教はどういうことになりますので」 明主様「霊界から働きますから、何でもないです。」</p> <p>3. 昭和29年11月5日(米国の記者シモンズ氏との対談記事、岡田茂吉全集講話篇第11編199ページ): 新聞記者の話の時に「そんな理想世界が実現すると言ったところで、よほど先のことだろう」というように思っていますから、「冗談ではない、私が生きていううちにとにかく基礎だけは造るのだから」と言ったところが、妙な顔をしてました。それから御守りの話が出て、「御守りで病気を治すが、あなたがあの世往ったら御守りを作る人がないからしょうがないでしょう」と言うから、「冗談ではない、<u>霊界からいくらかでもそういう力を振るうから、そういうことは別に何でもない。</u>」と言ったところが、「ハハア」と首をひねっていました。</p> <p>4. 昭和29年11月24日(「栄光」284号)新聞関係者(朝日、毎日、読売、産経、東京、中部日本、静岡民報、熱海、伊豆毎日などの有力紙10社以上)と対談: 明主様は、厳しい浄化の中でも、記者たちに向かって、上記と同様の趣旨の発言がなされたことと記録されています。</p> <p>5. 明主様の次女吉岡(旧姓岡田)三弥子様(1925～2017)(三代様の姉君)の発言:三弥子様は、小林理事長や教団幹部との対談の中で、上記と同様の趣旨の内容の発言を何度もされていたとの証言があります。</p>	<p>『お言葉の要旨』 ① 四代様は、明主様のご昇天前の昭和29年6月5日のメシヤ降誕時の「<u>メシヤが生まれた」</u>「<u>新しく生まれた</u>」<u>「生まれ変わるのではなく」との発言</u>をもとに、この日以前の明主様は古い明主様であり、それ以降の明主様は新しい明主様であると説かれています。その上で、古い明主様によって説かれた教えは古い教えであり、新しい明主様によって説かれる教えが新しい教えであると述べられています。そして、「<u>新しく生まれた神が正しい。その正しい教えは教主である(私)四代が聞き、伝えるものである</u>」と主張されています。(根拠資料1～3)。 ② 四代様の意を汲んだ真明氏は、四代様のこれらの言葉を捉えて、「これはもう大どんでん返しですよ」と発言し、「明主様は、それまで自分が説かれたことを含めて、本当に『ああ、全然違ったんだ、思い違いをしていたんだ、これなんだな』と、全く新しいお気持ちで、神様からの新しい御教えを受けられた」と思うんですよ」と述べられています。(根拠資料1、2) ③ 平成28年11月30日に開かれた四代様と宗務役員との懇談会の場において、四代様は、「1. <u>教主様のお言葉を通して御教えの神髄に触れる</u>」、「2. <u>全く新しい信仰を一人でも多くの人に伝える</u>」、「3. <u>聖地に求めつつ、自らの内なる天国に気づく</u>」という自らが策定した「<u>宣教重点課題</u>」を、いつのめ教団の29年度の宣教方針へ織り込むよう要求され、自らのお言葉を通じて「<u>御教えの神髄</u>」や「<u>全く新しい信仰</u>」を人々に伝えることができるとの考えを示されています。(その時の発言録は、その後四代様の指示により、前田宗務長と白澤事務長名で全国教会長へ配布されています。)(根拠資料4) ④ 四代様は、「私が言っていることは、御教えの底流に流れている、明主様の想い、主神様の神意を汲み取ったものだ」「私は、私達凡人の入りようもない世界で、<u>明主様の御教えに触れられて、そこから感ずること、読み取れることを話しているんだ</u>」との発言をされています。つまり、四代様の言葉は、「明主様からのご内流によるものだ」との趣旨の発言をされています。(根拠資料5) ⑤ 「教主中心の信仰」を唱えている主之光教団は、「私共は、教主様のご教導を賜り、<u>教主様ご自身が全身全霊をもって明主様の御教えを学ばれて、明主様の御心を求めておられる、その結果としての教主様のお言葉であることを痛切に感じさせて頂いている</u>」と表明しています。つまり、主之光教団(執行部)は、四代様のお言葉を、世界救世教の新しい信仰であると位置づけ、唯々諾々と従っている実態が伺えます。(根拠資料6)。四代様は、こうした主之光教団の姿勢に共感し、その支持を強く表明されていることを考えると、同教団執行部の発言の背景には、四代様の強い意向が反映されているものと推察されます。 ⑥ 四代様は、「その主神の思いを感じ受け止めさせて頂こうとする中で、“私の理解と認識を超えて”気づかせて頂いたことを、明主様のお許しを得て、でき得る限り皆様にお伝えすることが私の務めではないかと思っております」と述べられています。(根拠資料7)</p> <p>『四代様お言葉の根拠資料』 1. 平成28年8月10日発行「新生」413号):四代様は、本号の見出し「<u>徳積みや利他行を超えて新しい明主様の救いに目覚めよう</u>」中で、今までのご神業である「<u>徳積み</u>」や「<u>利他行</u>」は古い、その上に新しいものがある、そのことに「<u>目覚めよう</u>」と訴えておられます。そのことが、「<u>古い神(明主様)が説かれた教えはまさに古いのであって、これからは新しく生まれた神が正しい。その正しい教えは教主である(私)四代様が聞き、伝えるものである</u>」との独自の主義・主張へと繋がっています。 2. 平成28年2月22日真明氏と若手専従者の懇談会:真明氏は、明主様が昭和29年6月5日、「メシヤが生まれた」「新しく生まれた」と言われたことを捉え、「これはもう大どんでん返しですよ」と発言し、明主様は、「それまで自分が説かれたことを含めて、本当に『ああ、全然違ったんだ、思い違いをしていたんだ、これなんだな』と、全く新しいお気持ちで、神様からの新しい御教えを受けられたと思うんですよ」と発言しています。 3. 平成28年4月14日第3回真明氏と若手専従者と懇談会:真明氏は、「今まで我々が説いてきた利他愛は、明主様がおっしゃってる利他愛とは根本的に違うんだけど、そういう我々が思い込んでいる『利他愛』とか『人間的な修養』ということを打ち出す、とという世界から我々はなかなかはなれることはできない。(中略)だから、教主様がお説きになっていることは、やはり人間中心の思いでいこうとすると、拒否したい、ということになると思うんで</p>	<p>① 「新しく生まれた」ことが「新しい明主様」「新しい御教え」になるのでしょうか? 明主様は、ご自分の霊界入り後の「教主」あるいは「教主の座」というものについて、御神書の中では、まったく何も触れられていません。ただ各界の知識人、マスコミ関係者との対談(御教えの根拠資料1～5)の中で、ご自分が亡くなってからも霊界からお光の玉の力(観音力)を自由無碍に働かせることができるから何も問題ない、身体があるとかえって邪魔になる、という発言を繰り返されています。(明主様根拠資料1～5)。つまり、対談で語られた明主様の発言の趣旨は、明主様の霊界からのメッセージは、「教主」あるいは「教主の座」に関係なく、<u>霊線を通して現界の我々に直接伝えられることをお示しになったものと考えられます</u>。事実、明主様からご啓示や気づきを直接受けたという信者が多数報告されていることから、この事実は裏付けられているものと思われます。一方、四代様や真明氏は、浄化中の明主様の昭和29年6月5日碧雲荘の病床における「メシヤが生まれた」「新しく生まれた」「生まれ変わるのではない」とのお言葉を捉え、各教区や職員との懇談会等で、再三、「この日以前の明主様は『古い明主様』で『古い御教え』を説かれてきたのだが、この日以降の明主様は『新しい明主様』で『新しい御教え』を説かれているんだ」との独自の解釈を述べられ、しかも、『古い明主様』によって説かれた『古い御教え』は、“ああ、全然違ったんだ、思い違いをしていたんだ”、とまで言い切っておられます。(四代様根拠資料1、2)。さらに、『新しい明主様』は、これから『新しい御教え』をお説きになっているが、新しい明主様は、現世にお姿がないので、その教えは、私(四代様)が聞き、信徒に伝えることになっている」、だから、私(四代様)の教導する教えは、新しい明主様から発せられたものである」と述べられています。しかしながら、この「古い」や「新しい」との発言に関わる御教えは、御教えの中には一切見当たりません。仮にも、四代様のこれら解釈が正しいとするならば、明主様の御教えは「古い」「間違っている」ということになり、明主様の権威や御教えの本義、浄霊などの意味合いやその在り方が根底から覆ることになり、世界救世教を揺るがす大騒動に発展する可能性があります。個人的に独自の解釈をされるのは自由ですが、「教主の座」にある四代様が、懇談会などとは言え、教導の立場で話すことは、個人的な見解には到底なり得ず、不穏当、不適切と言わざるを得ません。教主様と雖も、このような御教えにもない救世教の根幹に関わるような重大発言をされる場合は、その発言内容の正当性、妥当性を証明するだけの客観的根拠を示した上で、然るべき機関で厳正かつ慎重に吟味された上で発信されなければならないことは言うまでもありません。客観的根拠のない独善的な発言は、「教主の座」にある人には厳に慎まなければならないことです。</p> <p>② 「メシヤが生まれた。新しく生まれた」との発言は「大どんでん返し」なのでしょうか? 明主様は自分が説かれた御教えが本当に「間違っていた」と思われたのでしょうか? 四代様の意を汲んだ真明氏は、いつのめ教団若手専従者との懇談会(根拠資料2、平成28年2月22日)において、明主様の言葉を捉え、「これはもう大どんでん返しですよ」と発言し、「明主様は、それまで自分が説かれたことを含めて、本当に『ああ、全然違ったんだ、思い違いをしていたんだ』と、全く新しいお気持ちで、神様からの新しい御教えを受けられたと思う」と述べられています。もし仮に真明氏の発言内容が事実だとすると、明主様の御教えの大部分は間違っていたことになり、世界救世教の存在そのものが間違いということになってしまいます。しかし、真明氏の言われるような“全然違ったんだ。思い違いをしていたんだ”と言われるような趣旨の発言は、明主様の残された記録のどこにも見当たりません。仮に、明主様がこのような重大な意味をもつ発言をされたのであれば、当然のことながら、当時の教団刊行物「地上天国誌」や「栄光新聞」等のどこかに必ず明主様の御意志が発表されている筈です。しかしながら、これらの刊行物には、昭和29年6月以降も何ら変わることなく、従来の御教えを主体にした多くの御守護話が掲載されています。したがって、四代様の意を汲んだ真明氏の発言は、<u>事実とはまったく異なる根拠のない発言であると断ぜざるを得ません</u>。四代様や真明氏のこうした発言は、「今、主神は、明主様を通して、教主様に新しい御教えを示されている」「ご神意は教主様に下る」というドグマを広く信徒に植え付けようとしているとしか思えない極めて不穏当、不適切な発言だと思われれます。</p> <p>③ 「御教えの神髄」は教主様のお言葉を通してしか学ぶことができないのか? 四代様は、様々な機会を捉えて、「教主様のお言葉を通して御教えの神髄を学ぶ」と繰り返し主張されています。(根拠資料4)。しかし、この主張が正当だと判断されるためには、当然のことながら、その主張は明主様の御教えに従っていなければなりません。その上で、二代様が言われたように、御教えには時というものはありませんから、必要に応じて、その時代・時節に必要な御教えを取り上げて、その教えの裡にある明主様のご神意を的確に読</p>

す」と述べられています。(中略)さらに、「教主様は、一度たりとも、人間の目的は、『人の役に立つことだ』と言われたことはないんですね。むしろ教主様は、『 “ 人間の使命は人の役に立つことだ ” という世界は古いんだから、そこから一日も早く脱しなさい』と、そういうことに気づいて欲しいと願っていらっしゃると思うんです」と語っています。

4. 平成28年11月30日教主様といづのめ教団教区長との懇談会：四代様は、「『宣教重点課題』は、私(四代様)が申し上げたことを1、2、3、として取り上げて下さって、それとは別に『私たちの取り組み』というのを作られましたよね。『宣教重点課題』は元々は、『1. 教主様のお言葉を通して御教えの神髄に触れる。2. 全く新しい信仰を一人でも多くの人に伝える。3. 聖地に求めつつ、自らの内なる天国に気づく』。その後の『4』以降について、皆様からの案、内容を生かして頂ければと思ったんだけど。皆様は、そういうやり方ではなくて、私の出した3つの『宣教重点課題』はそれとして、それとは別に、『私たちの取り組み』ということで、それを5つ出されましたよね。『1. 会う・聞く・浄霊するの實踐、2. 3つの活動の實踐、3. 救いの許される教会づくり、4. 世界布教への参画、5. 青年育成』。こうやって、私の提案した『宣教重点課題』と、それとは別に『私たちの取り組み』とを分けられた理由は何だったのかなと思って、それをお伺いしたいんですけども」と述べられ、ご自身の「宣教重点課題」をいづのめ教団の「私たちの取り組み」の中に組み入れるよう求められておられます。

5. 平成28年2月24日西日本教区信徒大会事後報告、四代様お言葉：四代様は、「去年(平成27年)の秋季大祭の時に、昭和5年の明主様の手記についてお話しましたように、明主様の御心の根底に流れているもの、それが大切だなと思ったんです。その根底に流れている、我々が気づかせていただかなければならないことについて、僕は、僕が感じさせられたことしか申し上げられませんか、こうした会合の場とか祭典の場とかでね、明主様が今我々に気づかせてくださろうとしているのはこのことではないか、と私が感じさせられたことを申し上げているんですね。だから、明主様の御教えと教主様のお言葉というふうに分けて捉えられてしまう傾向があるんですけども、それは、今までの受け止め方からすれば、明主様の御教えと教主様のお言葉は違うんじゃないかと、矛盾するんじゃないか、というふうに受けとめられてしまうと思うんです。だけど、私がなんといっても申し上げたいのは、明主様の御教えなんですよ。明主様の御教えの中には主神のみ旨、思いがあります。主神は、ご自身の思いを明主様を通して我々に伝えようとしていらっしゃいます」と述べられています。

6. 平成30年3月4日主の光教団「春季大祭・豊穣祈願祭」成井理事長挨拶：成井主之光理事長は、「私は、教主様が、明主様のすべての御教えやご事蹟に込められた本当のみこと、その源にある神様の御意志をなんとしても受け継ごうとされる強い覚悟を持たれて、私どもをご教導くださっているものと固く信じております。私どもが、“本当の明主様”に辿り着くためには、教主様のご教導がどうしても欠かせないものと心から実感しております」と発言されています。

7. 平成30年2月15日北陸関西教区信徒総代野呂恵美子、中野利栄氏への四代様の回答書：四代様は、「「その主神の思いを感じ受けとめさせていただくこうとする中で“私の理解と認識を超えて”気づかせていただいたことを、明主様のお許しを得て、出来得る限り皆様にお伝えすることが私の務めではないかと思っています」と述べられています。

み説いて、それを信徒たちに間配るのも「教主の座」に在る者の役目です。(参考資料①)。つまり、時々の教主の言葉が、教主個人のパーソナリティによって左右され、明主様の御教えと矛盾したり、真逆の主張になったりするようなことは決してあってはならないということですね。また、四代様のこの発言は、裏を返せば、四代様のお言葉以外は御教えの神髄ではないという意味にも受け取れます。これまで明主様の御教えを信仰の規範としてきた多くの信徒にとっては、その意味合いや在り方を根底から覆されてしまう可能性があります。明主様の御教えは古今を通じて寸毫も変わることのない真理であることを考えれば、四代様には「教主の座」に在る者として、その発言内容を十分に吟味され、信徒に誤解や混乱をもたらすことのないように慎重な配慮が必要です。

④ 明主様は絶対的な指導者で祈りの対象、しかし教主様は絶対的な指導者でも祈りの対象でもない!

明主様は、私たちにとって絶対的な指導者であり、信仰の対象です。一方、代々の教主様は絶対の指導者でもなく、信仰の対象である神様でもありません。明主様は神様になられましたが、教主様は人間です。三代様が言われたように、「教主中心の神業体制」はあっても、「教主中心の信仰」はあり得ません。(参考資料②)。どこまでも、我々信者の信仰の対象「大光明真神」であり、明主様であることは言うまでもありません。

⑤ 「教主中心の神業体制」と「教主中心」の意味あいの違いとは?

いづのめ教団は発足当初より一貫して「教主中心の神業体制の確立」を目指してきました。しかし、いつの間にか「教主中心」という言葉だけが独り歩きを始め、「教主様のご意向には無条件で従わなければならない」という誤った解釈が拡がってきています。この考え方の拡大が、今日の教団の大きな混迷の最大要因の一つであることは言を俟ちません。三代様は、「教主中心の信仰ではない。教主の座が大切なのだ」と繰り返し述べられ(参考資料②)、「教主中心の神業体制の確立」を強く訴えられていました。「教主中心」という極めてあやふやな言葉を流布し、恣意的な解釈で事態を混乱させてはなりません。宗教法人は公益性のある社会的存在である以上、専従者や信徒に混迷をもたらし、延いては社会に不安をもたらすような「教主中心」なる言葉は、意味を明確にして、教規等の条文でも組織的な位置づけの面でも盤石のものとしておかなければならないことだと考えます。

⑥ 教主様が特別であるのは「教主の座」にあるから!

教主様が特別であるのは、教祖の聖業を継承し、教義に基づき世界救世教を統一する責務を果すべき「教主の座」にあって、世界救世教教規に定められているご神業(教規第7条～17条)、即ち、(1)御神体及びお光りを授与する、(2)祭儀を司る、(3)教義、祭儀及び聖地建設の大綱を定める、(4)被包括宗教団体からの上申に基づき、教師資格の認証などを行う、(5)管長、理事、被包括宗教団体の代表役員及び代表役員たる者の選任を承認する者の認証する、(6)規則、教規及び宗家規定の変更の承認、(7)聖地の処分承認、(8)世界救世教の合併又は解散の承認)を行う等の権能を有されているからです。つまり、教主様は、「ご神業にあたって、明主様と信徒の間に立たれ、上からはご神意をお取次ぎ下さり、下からは信徒の信仰の誠をお受けになり、どこまでも明主様に真向かわれている純粋なお立場におられる」からこそ、特別なのです。

⑦ 教主様が特別であるのは「信者統合の象徴の座」にあるから!

教主様は、宗教法人世界救世教規則第5条第2項および教規第1章総則第5条第2項により「信者統合の象徴」とされています。「象徴」という意味は、天皇陛下が「日本国及び日本国民統合の象徴」として「日本国憲法に定める国事を行う」という例を挙げるまでもなく、「信者統合の象徴」である教主は、世界救世教教規第7条から第18条によって定められた宗教行為のみを行うよう明確に定められております。つまり、教主は、この教規に定める宗教行為以外の教団の管理運営等に関する権能を有していません。教主は、教規第9条で教義、祭儀及び聖地建設の大綱を定める権能を有していますが、その権能を行使する際には、上位規則第4条に規定されている範囲の中で行わなくてはなりません。また、教主は、被包括法人から上申された教師資格の認証や管長、理事、被包括法人の代表役員及び代表役員たる者の選任を承認する者の認証を拒否できないことになっているのです。法令順守、教団の規則・教規の順守は、公益性のある宗教法人のトップである教主には特に強く求められるものなのです。

⑧ 「教主の座」は、二代様が教主になられた時に初めて使われた言葉であります。その背景には、明主様亡き後の教団の混乱や幹部・信徒の離脱などから、教団に対する専従者や信徒の不安や動揺が起こり、教団としてそうした事態を一日も早く鎮め、教主のもとに一致結束して第二の創業を行う必要があったこと等が理由として考えられます。そうした中で、教主の権威化を図ることが当時の最大の課題であったと推察されます。しかし、こうした状況の中にあっても、二代様は、明主様の説かれた御教えを最高の真理として研鑽していく必要性を強く説かれています。(参考資料③)。なお、二代様の時代は、現在の包括法人世界救世教「規則」および「教規」が制定される前であったことを念頭に入れておく必要があります。

⑨ 三代様は、「教祖が教主であった第一の創業の時は、その明主様におすがりしておればお力を頂けたが、三代、四代、五代教主が立つ第二の創業はそうではない」と明言され、人間教主が立っていることの意義を説かれました。その上で、「人間教主が大事ではないのですね。教主の座が大切なのです。救世教が明主様の御教えを守り、聖地を安泰にし、この教団のご神業の営み、ご経緯をゆがみなく進めていくために中心が必要なので、それが教主の座である」と説かれています。三代様も、二代様同様、明主様の説かれた御教えを最高の真理として研鑽していく必要性を強く説かれています。(参考資料②)。

⑩明主様は、腹中に「光の玉」があることを明言され、霊界における観世音菩薩の如意の珠から、それに向かって発せられる無限力が無限光(観音力)となって、我々に放射されると説かれています。つまり、これが「浄霊の本源」とされているのです。(天国の礎 宗教篇上 17 - 20 ページ)。この「光の玉」と「教主」あるいは「教主の座」について、二代様は明主様ご昇天後はご自分に頂かれていますと述べられ(御講話集・教師向・於関東教務支所、昭和35年5月17日)、三代様は明主様の腹中にあった「光の玉」は、その光につながれた「教主の座」にあると説かれています(昭和60年5月12日)。この「光の玉」が明主様の腹中に存在していることについては、明主様ご自身がその経緯や時期および根拠をもって明確に説明されています。しかし、二代様や三代様の場合の「光の玉」は、いつ、如何なる経緯で腹中に鎮座したのかは、判然としておりません。一方、四代様は、これまでこの「光の玉」について明確な言及をされておられません。世界救世教は、明主様の權威、御教え、浄霊によって確立されている世界です。世界救世教の力の根源である「お光の玉」あるいは「おひかり」について、四代様はなぜ何も発言をされないのでしょうか。教主の立場にある人として、きちっとした見解を示されるべきだと考えます。また、二代様と三代様は共に、「教祖明主様が説かれた御教えの数々は、最高の真理であり、古今を貫き永遠に生き、地上天国建設の基となるものであること」を最重要事項として明言されていることについて、四代様はどのようなお考えをお持ちなのでしょうか。

『参考資料』

①二代様のお言葉

◇教主の御座は、御神命によって、現教主様が御継承遊ばされたのですから、教団の経緯は教主を通じて行われるのであります。たとえて言えば、教祖は霊、教主は霊体にて共に教主の座にあらわれるのでありまして、現実の経緯は、総て教主が、主神の思召を奉載して遂行されるのであります。(地上天国 昭和32年2月号)

◇“神は順序なり”という御教えの通り、主神＝教主の座と厳然たる神的順序があり、教団の主体である教主に対しては、教団経緯に必要な神権、即ち教義に関する権限、祭祀に関する権限、その他教団運営上にあらゆる事項に関する裁決権(注：現在は宗教法人法第19条によって、この権限は認められておりません)は当然主神から賦与されているのであります。教団は主神の救世の一機関であって、開教の観点からしては、明主様の御肉体ともいえまじょう。ですから、あくまでも主と従となるものの関係を弁え、神の経緯に奉仕しなければなりません。(地上天国 昭和32年2月号)

◇神様明主様から定められた教主というものが、この教団としての公のこの道の案内のためにおかれている。神様がそういうふうにご許しておられるのであります。従って、教団の太い方向付けというものは、やはり神様明主様が私の口を通してなさるので。(中略)

勿論、以前と全く同じものは出来ませんが、この今の世に対してこういうふうに行かなきゃならんという線は、神様と明主様の御意志によって私につたわってくるものである。(昭和34年3月23日第1回教師講習会講義概要：二代様お言葉より)

◇皆様は教えとして明主様から御教書を頂いておりますが、御教書には時というものがありませんかから、その時節時節に私が御教えを取り上げて、線を出していくというふうに、教主の教というものもなくてはならないのであります。従って、御教書だけでは時と共に新しく生きてゆけないのでして、やはり教主と結びついて初めて本当の実際の活動がそこに生まれてくるのです。(教会長に賜ったお言葉 昭和35年7月9日)

◇教祖明主様が説かれました御教えの数々は最高の真理でありまして、古今を貫き永遠に生き、地上天国建設の基となるものであることは、今更言を俟ちません。従って、御教書の研鑽が、信仰上の重要ポイントであることも又当然でしょう。(中略)原典の解釈、集成、統一、敷衍(ふえん)等、教化の最高指導責任者は、その時代時代の教主であります。言わばこれは惟神の職権であって、明主様ご昇天後は霊界から現在の、救世教教主を通じ御念願の地上天国建設を御推進遊ばされるのでありまして、その御心は私の胸に映り、教化上の大綱は私を通して指示されるのであります。(布教テキスト・序 昭和34年8月)

②三代様のお言葉

◇教主というのは、教団から一生活を保障されているのです。立身出世なんて思わなくも、家族のことを心配しなくても、信者のことさえ、ご神業の進展さえ心配しておれば、後は

後顧の憂いがないのです。ですから、誰にご機嫌をとることも、どういう関を作るということも一切いらぬのです。ただ、神様に心を通わせながら、御教えに外れていないだろうか、本当に無私の目で皆さんの動きを見張っていると、それが教主の立場でありますね。(昭和59年10月31日三代様お言葉より)

◇ご神業というのは教主中心だからといって、教主がすべて表面に出て行って、あれせよこれせよというのではないのです。もうこんなに大きくなった教団、明主様の時代と違うのであります。全部執行部がその運営をまかされて、ただ教主の意向は伺いながら、教主の喜びを常に自分の判断の基準としながら、教団を運営していくのでございますね。そういう意味で教主と二身一体でなければいけない。で、常にどのような事も重大な報告は、すべて教主の耳に入れて、教主のみ心に叶うのか、ひいては、大神様、明主様のも心に叶うかということ判断して、それでそれぞれの衝の責任を果たしていく、そこに教主としての務めがあるのでございます。ですから、教主の意を無視して行うということは、こ

れはもう教主を否定している。(昭和59年10月31日三代様お言葉より)

◇教主奉載ということには二種類あると思います。それは今日までのように、教主を象徴としてお飾りとして立てて、どこまでも運営が主体としていく行き方。それからもう一つは、同じ象徴としながらも、やっぱり信仰的な最高の指導者となっておりますが、神意の取次者として、明主様と信者さんの中間に立って、上からはご神意を頂き、下からは信者の誠を私心のない立場で取次がさして頂いて、純粋な立場で御守護を仰いでいく、そして一度事あ

る時には、信仰の絶対的な權威として機能する教主であり、そのもとに運営を預かる執行部という在り方でございます。(昭和59年12月22日三代様お言葉より)

◇教主とは生きた教団の御神体と申しますか、御神殿には大光明真神の御神体がお祀りされておりまして、大神様、明主様のご神霊がお鎮まりになって、常に御守護をくださいます。(中略)ご神業が生きて進んでいくのも、教団が和合していくのも、明主様の御教えと信仰の伝達者として教主がそこに立っていればこそです。(昭和60年3月28日三代様お言葉より)

◇第一の創業の時には、神人合一の明主様がお立ち下さったのです。その明主様におすがりしておればお力を頂いたのです。でも、もう、三代、四代、五代は違うのです。第二の創業はそうではないのです。人間教主が立っていくのです。皆様が押し上げることによって支えられる教主なのです。(中略)同じ人間でありながら、お役の立場に立って下さる教主様、私たちの先頭に立って下さる教主様、ご苦労様ですと、そういう暖かい人間の心で押し上げて下さればこそ、そこに使命感も湧かせられ、一心に務めて明主様に近づき、お光を取次ぎ、御守護を間配らせて頂くことができるのです。このことを皆様によくご承知いただきたいと思うのです。私に対する人間信仰ではないのです。教主と言う座に対する信仰であってほしいのです。三代、四代、五代、どのような人が立ちましようとも、それを中心として信仰を捧げると、そこで本当に神様のお光が発せられてくるのでございます。(昭和60年11月9日三代様お言葉より)

◇人間教主が大事ではないのですね。教主の座が大切なのです。救世教が明主様の御教えを守り、聖地を安泰にし、この教団のご神業の営み、ご経緯をゆがみなく進めていくために中心が必要なのでございます。それが教主の座であります。それを中心にして運営が行われていく(注:現在は法律上、この権限はありません)というところで、四代、五代、六代までも揺るぎのない御神業というものの継続がある訳でございます。(昭和60年11月16日三代様お言葉より)

◇救世教にとって肝腎なことは神的順序ですね。明主様亡き後の教団では、その血統を継ぐ者が教主になる。(注:御教えには規定されていません。)その教主をたててご神業を行っていく。これが当然であります。(中略)ところが、本教においては教主制はとりましたものの、ある時から教主は象徴になり、執行部が表に立つようになったわけですが、しかし、これは自然の流れであったのです。それが崩れ出した時、今度は象徴であった教主が表に出ることになりましたわけで、これもまた自然の流れであったのです。その自然の流れの中で時期と共に神的順序が正されて、そこで生まれた教主中心でございます。人間力ではないのです。(中略)明主様から霊的にも、体的にもご神業を継承した教主が表に立って、これからご神業を進めて下さる、ああよかった、これが本当の教団の姿になった、そう思った信者さんが喜びに燃え上がり、浄霊をお取次ぎしたらば、そこに御守護が生じてきたと、これが本当の信仰の在り方なのです。(中略)しかした、明主様は神様、教主様は人間、お願いは明主様でなければということも結構なのです。(昭和60年12月22日三代様お言葉より)

【「古い信仰」と「新しい信仰」について】

明主様のご神書(御教え・教典・岡田茂吉全集)	四代教主様のお言葉	いづのめ教団対策本部事務局としての見解と根拠
<p>『御教えの要旨』 ①当然のことながら、「新しい信仰」とか「古い信仰」といった御教えは存在しません。明主様が「新しい」という言葉をお使いになったのは、昭和29年6月5日の「メシヤ降誕」時における「メシヤが生まれた」「新しく生まれた」「生まれ変わるのではない」と述べられた時のただ一度だけです。</p>	<p>『お言葉の要旨』 ① 四代様は、「昭和29年6月5日の『メシヤ降誕』時の以前の明主様は『古い明主様』、その日以降の明主様は『新しい明主様』であるとした上で、『古い明主様』によって説かれた教えは『古い御教え』として捨て去り、『新しい明主様』によって説かれる教えが『新しい御教え』『新しい信仰』であり、『新しい世界救世教』である」と説かれています。(根拠資料1)。 ② 「新しい明主様」は「新しい御教え」を説かれているが、現世にお姿がないので、その教えは、四代様が聞き、信徒に伝えることになっている、だから、四代様が教導する教えは、「新しい明主様」が説かれる御教えである、と主張されています。(根拠資料1)。 ③ 四代様は、「私が言っていることは、御教えの底流に流れている、明主様の想い、主神様の神意を汲み取ったものである」と言い、ご自身の言葉が唯一明主様の新しい御教えを伝えている、と述べています。(根拠資料2) ④ 四代様は、昭和29年6月5日の明主様のお言葉を捉えて、「明主様ご自身が重大な意味を持つお言葉の中で、“新しく生まれる”のであって、“生まれ変わるのではない”とおっしゃった」と述べられ、明主様がこれまで繰り返し説かれていた「<u>人間の輪廻転生</u>」を明確に否定されています。(根拠資料3、4) ⑤ 四代様は、「『私どもが新しく生まれる』ことは、『私どもが生まれるのではなく、主神ご自身が、私どもの中にお生まれになる』というみ旨を成し遂げられることではないか」と述べられています。(根拠資料5、6) ⑥ 四代様は、「現象の世界を創造する前の世界(天国という霊の世界)で、<u>我々の始まりは、その天国にある</u>」と述べられ、「その天国は自分の意識の中心にある」とされています。さらに、「我々は、現象の世界に属しているのではなく、天国という霊の世界に属している」とも述べられ、「自分が天国に属していることを思い出していただかなければならない」と独自の主張をされています。(根拠資料5、6) ⑦ その理由を、「我々は、天国で神様から、明主様と共に、神様の業にお仕えするという公的な使命を受けて、この世に送り出されているからだ」と説明されています。その使命とは、「<u>神様の子供となる</u>」というもので、我々は、すべてのものと共に、始まりの天国に立ち返って、「神様の子供」とならなければならないとし、それが「新しく生まれる」ということであり、「永遠の命」を授けて頂くということであると結論づけておられます。(根拠資料5、6) ⑧ 四代様は、「<u>全く新しい信仰に目覚めよう</u>」というように、「まったく新しい」、「今まで我々が気付かなかったことがある」、という言葉を盛んに使われ、それは、我々が今までは、この世だけで生きていてと思って、「<u>人間の営みと神様の営み</u>」を分けているような考え方、「<u>霊と肉</u>」、「<u>天国と地上</u>」、「<u>自と他</u>」というふうに分けていた考え方があったことによると述べられています。しかし、そうではなくて、神様は全部の中にいらっしゃっている。全部を包んでいらっしゃるんだと。全部を包含していらして、全部の中にいらっしゃるって、何にも区切りがないんだ、全部をお使いになっているんだと、気づかなければならない。自分の良い心も悪い心も、良い面も悪い面も至らない面も、全部をお使いになっているんだと、というふうにもし気づかせていただけたら、その気づいた瞬間、感覚、感触としては、「新しい」という感じがする、でも結局は、「新しい」といっても、「<u>思い出すこと</u>」なんだと説かれています。(根拠資料8)。 ⑨ 四代様は、「すべては<u>主神から出て、主神に帰る</u>。これが創造の御業です。主神は地上で個々別々の自我意識をもたせた私どもを、今度は万物と共に<u>再び天国に迎え入れ、ご自身の子としてもう一度うまれさせてくださる</u>としておられます。そして、その天国で私どもと共に、<u>住んでくださり、常に新しい創造のみ旨に私どもをお使いになろう</u>としておられます。このようにして地上の全てが、天国に立ち返って、天国と一つになり、主神にお仕えさせていただくことが本当の意味の<u>地上天国建設</u>、すなわち主神の創造の御業なのではないでしょうか」と述べられています。(根拠資料9)。また、「主神は、ご自身の創造の御業をすでに天国において成し遂げられている」、「<u>地上という世界が天国という世界の中に</u>ある」と述べられています。(根拠資料7)。</p>	<p>① 四代様が主張される「古い」「新しい」明主様や御教えは本当にあり得るのか？ 四代様は、浄化中の明主様の昭和29年6月5日の碧雲荘病床における「メシヤが生まれた」「新しく生まれた」「生まれ変わるのではない」との一連のお言葉の中から、「新しく生まれた」との発言を捉えて、「明主様は『新しく生まれた』。新しく生まれた明主様が居られるのだから、説かれる「御教え」も新しい。つまり、これ以前の明主様は『古い明主様』でその説かれた『御教えは古い』。だから、それらは捨て去って、『新しい明主様』によって説かれる『新しい御教え』を説く必要がある」と主張されているのです。その上で、「新しく生まれた明主様は『新しい御教え』を説かれているけれど、現世にお姿がないので、<u>その教えは、四代様が聞き、信徒に伝えることになっている</u>」。したがって、四代様が教導する教えは、「新しい明主様が説かれる御教えである」と述べられています。(四代様根拠資料1、2)。しかし、四代様のこの主張は本当に正しいのでしょうか？メシヤ降誕時の明主様の発言記録を調べてみると、明主様のお言葉は「メシヤが生まれた」→「生まれ変わるのではない」→「新しく生まれた」となっており、この語順で文脈を読む解く限り、主語はメシヤで、意味する内容は「メシヤが生まれた」ことに関する事象のみを表したものと解釈されます。つまり、明主様のお言葉には、「明主様が生まれた」という意味合いは含まれていません。しかし、四代様は、明主様の文脈を「メシヤが生まれた」→「新しく生まれた」→「生まれ変わるのではない」というように語順を置き換え、「メシヤが生まれた」ことが「明主様が新しく生まれた」ことになると意識し、「新しく生まれた明主様」が「生まれ変わるのではない」と言われたのだから、「私たちの本質も生まれ変わる存在ではない」との独自の解釈をされているのです。つまり、「メシヤが生まれた」と「生まれ変わるのではない」「新しく生まれた」の文言を切り離し、「生まれ変わるのではない」「新しく生まれた」の語順を置き換え、ご自分の主張に合うような理論構成にして解釈をされているように思われます。一方、四代様が主張される「古い」「新しい」発言に関わるような記載は、明主様の御教えの中には一切存在しません。従って、四代様の「新しい信仰」「古い信仰」に関わる主張には、論理の飛躍があることから、事実上意味をなさないものになると考えられます。 言うまでもなく、明主様が説かれた御教えは最高の真理であり、古今を貫き寸毫も変わりなく永遠に生き続けるものです。四代様が、客観的根拠もなく、明主様やその御教えを「古い」という一言で捨て去るような乱暴な発言をされることは、明主様や御教えを否定することに繋がり、教団を揺るがす大混乱の原因となる可能性があります。仮に、四代様の発言の背景に、救世教にはない独自の固く信じる思想があったとしても、「教主」という極めて重い立場にある以上、その発言の妥当性、正当性を担保する客観的な事実や根拠を示した上で、然るべき手続きを踏んだ上で発言されなければなりません。明主様は私たちにとって絶対的な指導者であり、祈りの対象です。一方、教主様は絶対の指導者でもなく、祈りの対象である神様でもありません。</p> <p>② 明主様の霊界からのメッセージは四代様にしか伝わらないのか？ 四代様は、ご自分の発言は「御教えの底流に流れている、明主様の想い、主神様の神意を汲み取ったものである」「ご自身の言葉が唯一明主様の新しい御教えを伝えている」と述べられています。(四代様根拠資料2)。このことについても、四代様はその発言の妥当性、正当性を保証する客観的な事実や根拠を何も示されておりません。また、前述のように、「新しい御教え」という論理は成立し得ないことから、この主張についての議論は事実上意味をなさないと考えられます。一方、別項の「教主」「教主の座」で述べたように、これまでに残されている資料から、明主様の霊界からのメッセージは、教主や教主の座に関係なく、霊線を通して現界の私たちに直接伝えられるものであると考えられています。従って、明主様の霊界からのメッセージは四代様のみには伝えられるものではないと判断するのが妥当であると考えられます。</p> <p>③ 本当に「生まれ変わりはしない」のでしょうか？ 四代様は、明主様の浄化中の昭和29年6月5日のお言葉を捉えて、「明主様ご自身が重大な意味を持つお言葉の中で、“新しく生まれる”のであって、“生まれ変わるのではない”とお仰せになっているのです」と述べられています。(四代様根拠資料3)。また、四代様は、「主神からご覧になれば、死んだり滅びたりするものなど、一つもない」「私どもは、明主様の『メシヤが生まれた』というお言葉を通して、私どもの本質は、生まれ変わる存在ではないことを御教えくださった」と主張され、明主様の説かれた「<u>輪廻転生</u>」を明確に否定されています。(四代様根拠資料4)。四代様の意を汲んだ真明氏は、このお言葉を捉えて、「これはもう、<u>大どんでん返しだ</u>」「明主様は、それまで説かれたことを含めて、<u>本当に間違っ</u>たん</p>
	<p>『四代様お言葉の根拠資料』 1. 「新生」平成28年8月10日発行413号: 四代様は、本号の見出し「徳積みや利他行を超えて新しい明主様の救いに目覚めよう」中で、今までのご神業である「徳積み」や「利他行」は古い、その上に新しいものがある、そのことに「目覚めよう」と訴えておられます。それが、</p>	

「古い神(明主様)が説かれた教えはまさに古い。全く新しい信仰に目覚める」という発言の
抛り所となり、「これからは新しく生まれた神が正しい。その正しい教えは教主である(私)
四代が聞き、伝えるものである」との独自の主義・主張に繋がっていると思われま

2. 平成28年2月24日西日本教区信徒大会事後報告、四代様お言葉：四代様は、「去年(平成27年)の秋季大祭の時に、昭和5年の明主様の手記についてお話しましたように、明主様の御心の根底に流れているもの、それが大切だなあと思ったんです。その根底に流れている、我々が気づかせていただかなければならないことについて、僕は、僕が感じさせられたことしか申し上げられませんか、こうした会合の場とか祭典の場とかでね、明主様が今我々に気づかせてくださろうとしているのはこのことではないか、と私が感じさせられたことを申し上げているんですね。だから、明主様の御教えと教主様のお言葉というふうに分けて捉えられてしまう傾向があるんですけども、それは、今までの受け止め方からすれば、明主様の御教えと教主様のお言葉は違うんじゃないかとか、矛盾するんじゃないか、というふうに受けとめられてしまうと思うんです。だけど、私がなんとしても申し上げたいのは、明主様の御教えなんですよ。明主様の御教えの中には主神のみ旨、思いがあります。主神は、ご自身の思いを明主様を通して我々に伝えようとしていらっしゃる」と述べられています。

3. 平成20年2月4日立春祭：四代様は、「私は、私どもが新しく生まれるということの真の意味は、私どもが生まれるのではなく、主神ご自身が、私どもの中に新しくお生まれになるというみ旨を成し遂げられることではないか、と感じております」と述べられています。

4. 平成29年10月6日秋季大祭教主お言葉：四代様は、「明主様は、この時、メシヤが生まれたことを、言葉だけではなく、事実であるとされ、『生まれ変わるというんじゃないですね。新しく生まれるわけですね』とお述べになっています。明主様ご自身が重大な意味を持つお言葉の中で、『新しく生まれる』のであって、『生まれ変わるのではない』とお仰せになっているのです。明主様の信徒である以上、メシヤが生まれたという重大な発表の折に、この生まれ変わるのではない、というお言葉を発せられたという事実を避けて通ることはできないのではないのでしょうか。このお言葉を通して、私どもの本質は生まれ変わる存在ではないということ、明主様が新しく御教え下さった、と私は思えてなりません」と発言されています。また、「明主様も、『人間が生き変わり死に変わり何回も生まれ変わってくるのである』とお説きになりました。(中略)本日の明主様のお言葉をお受けし、改めて人間の命について考えますと、私どもが生まれ変わりがあると言うとき、それは限りある命、死を免れ得ない命を前提にしているのではないのでしょうか。私どもは、人の命は限りあるものと思い込んでいるからこそ、この世を去った後、再び地上に戻ってくると考えるのではないのでしょうか。このように、私どもは、死を免れ得ない命、人は必ず死ぬという命しか知りませんでした。明主様は、『魂機張る命の主は己にあらで神の御手にあるを知られし』というお歌をお詠みになっておられます。すべてのものは、永遠の命であられる主神によって創造されたものです。すべてのものは、主神の命に満たされています。主神からご覧になれば、死んだり滅びたりするものなど、一つもありません。しかしながら、地上に遣わされた私どもは、自分の中に主神の永遠の命が宿っていることを忘れ、命を自分たち人間のものとして生きてきたがゆえに、その命は死を免れない命にならざるを得なかったのではないのでしょうか。(明主様は)命の源である天国に立ち返られて、ご自分のものとしていた命、死を免れ得なかった命を主神に捧げられ、改めて主神の命を新しい命、永遠の命としてお受けになり、主神の子たるメシヤとしてお生まれになりました。明主様は、私どものために、悔い改められ、メシヤの御名にあって赦され、救われたものとして天国に立ち返られて、新しくお生まれになったのです。明主様は、死を免れ得ない命に囚われていた私ども全人類を救い出すために、新しい命に甦られたのです。それは、主神が死に囚われていた私ども全人類を、赦し、救い、甦らせ、すべてのものと共に、ご自身の子たるメシヤとして新しく生まれさせ、ともに天国に住ませるためです。私どもは、明主様と共に、新しい命に甦らせていただいたのです。私どもは、もはや死んでいくものではなく、生きたものとならせていただいたのです」と述べられています。

5. 平成18年12月23日御生誕祭：四代様は、「そうではなく、私どもの中に存在する天国は、滅びることのない永遠無限の、密度の濃い世界でありますから、その密度の濃い世界に融合し、新しく生まれるべく、私どもは、私どもの本質である天国に立ち返って、その世界の投影を受けて、もっともっと密度の濃いものに進化成長できるように導かれなければならないと思います」と述べられています。

6. 昭和26年6月30日いづのめ教団海外参拝団代表者との懇談会：四代様は、「大切なことは、神様が自我意識といわれる心を創造される前の世界、現象の世界を創造される前の世界があるということです。そこが、私が申し上げている“天国”と言われる霊の世界。そこにすべての始まり、原因がある。我々の始まり、出発点は、その天国にある。(中略)その始まりの天国は、自分の意識の中心に存在しているのです。(中略)我々は、この世という現象の世界に出て来てはおりますけど、本当は、天国という霊の世界に属しているのです。(中略)我々は、自分が天国に属していることを思い出させて頂かなければ

だ、思い違いをしていたんだ、これなんだなと感じられて、神様から新しい御教えを受けられた」と思うと述べ、明主様を否定するような発言をされています。(四代様根拠資料2)。仮に、四代様や真明氏の「生まれ変わりが無い」とする新しい主張が「正しい」とするならば、明主様が説かれてきた一連の御教えは、「古い」「間違っている」ということになってしまいます。そうならば、祖霊祭祀や祖霊大祭の意味あいや在り方も根底から覆されてしまうこととなります。しかし、四代様や真明氏の「生まれ変わりは無い」との発言も、前述の如く、その主張の根拠が成立し得ないことから、まったく意味のない主張になってしまいます。また、四代様の発言には、「無限の霊魂と有限の肉体の関係」や「霊層界における個々の霊魂の霊籍」についての言及はなく、明主様が大切なご神業として諭された御魂磨きについてもまったく触れられておりません。改めて明主様の御教えを拝読してみると、「人間は霊界における生活を何年か何十年何百年か続けて生まれ変わる」「生き変わり死に替わり何回でも生まれてくるので、仏語で輪廻転生とはこのことを言ったものであろう」「ある程度浄化されたものは、神の受命により再生する」等々、生まれ変わりを前提とした内容のものが多数存在していることに気づかされます。明主様の御教えを根底から覆すような四代様や真明氏のこうした発言は、教団を揺るがす大騒動に発展する可能性があります。明主様の説かれた輪廻転生を否定する四代様や真明氏の発言には、それらの主張を担保する客観的な事実も根拠も何も示されていません。従って、四代様や真明氏の発言は、極めて不穏当、不適切であり、信徒に多大の混乱と誤解を生じさせるものです。明主様のご聖業を継承される「教主の座」にある四代様が、教学上の大問題となるようなことを客観的根拠を示すこともなく、しかるべき機関での検討・吟味もまま、繰り返し発言されることは決してあってはならないことです。

④ 私たちの中に主神と分霊が二重に存在する意味は？

四代様は、「私どもが新しく生まれる」ことは、「私どもが生まれるのではなく、主神ご自身が、私どもの中に新しくお生まれになるというみ旨を成し遂げられることではないか」と述べられています。(四代様根拠資料3)。この発言は、すべての始まりの天国において、主神は私共の中に予め分霊をお生みになっているのに、さらに今度は「私どもが新しく生まれる」ために、「私どもの中に新しく主神がお生まれになる」ことを意味しており、主神と分霊(四代様は、分霊＝意識＝主神と説明されている)が、我々の中に二重に存在することになります。我々の中に二重に主神が存在することの意味は一体何なんでしょうか。この点について、四代様は、信徒が理解できるような懇切丁寧な説明をされる必要があると思われま

⑤ 四代様が言われる「新しく生まれる」とは何を意味しているのか？

四代様は、「私どもが新しく生まれる」ことは、「私どもが生まれるのではなく、主神ご自身が、私どもの中にお生まれになる」こと、「我々の始まりは、天国」にあり、「その天国は自分の意識の中心にある」、「我々は、現象の世界に属しているのではありません、天国という霊の世界に属している」、「天国で神様から公的な使命」を受けており、その使命は、「神様の子供となる」ということであり、それが「新しく生まれる」ことであると、述べられています。(四代様根拠資料5、6)。しかし、このような内容を説いた御教えは一切見当たりません。

⑥ 「全く新しい信仰」とは？

四代様は、「『全く新しい信仰に目覚めよう』という意味は、『人間の営みと神様の営みを分けているような考え方は間違っている、そうじゃなくて、神様は全部の中に居られる、全部を包んでおられる、全部をお使いになっているんだ、というふうに気づかせて頂けたら、その気づいた瞬間、感覚、感触としては“新しい”感じがする』ことだとし、結局、それは「思い出すこと」なんだと説明されています。(四代様根拠資料8)。しかし、当然のことながら、このような考えは、御教えの中にはまったく存在していません。

⑦ 「地上天国」の意味とは？

四代様は、「地上の全てが、天国に立ち返って、天国と一つになり、主神にお仕えさせていただくことが本当の意味の地上天国建設、すなわち主神の創造の御業なのではないでしょうか」「すべては主神から出て、主神に帰る。これが創造の御業です」と述べられています。(四代様根拠資料9)。また、四代様は、「地上という世界が天国の世界の中にある」とし、地上天国はすでに存在する」との意味の発言をされています。(四代様根拠資料7)。したがって、天国はすでに完成されており、それを認め、そこに立ち返るだけで良いと主張されています。これは、明主様が掲げられてきた「地上天国」とは大きく異なっています。明主様の言われる地上天国とは、霊界における天国建設がなされ、現実世界までも天国となることを目的としており、そのために、「真善美完き世界」「病貧争絶無の世界」「物質文明と精神文明の融合」を目指し、浄霊をはじめとする「救いの三本柱」や「天国の雛形の建設」に務めるよう御教えされています。四代様が御教えにない独自の思想に基づくこうした主張は、如何なる意図のもとに発せられているのでしょうか。信徒に対して真摯に説明がされるべきことだと思います。

⑧ 「始まりの天国」とは？

四代様は「始まりの天国」という言葉を繰り返し使われているが、それは、「いわゆる天国

ならない。なぜならば、その天国で我々は、神様から明主様と共に、神様の業にお仕えするという公的な使命を受けて、この世に送り出されてきているからです。その使命というのは、神様の子供となるという使命です。だから、我々は、すべてのものと共に、始まりの天国に立ち返って神様の子供とならなければならない。それが、「新しく生まれる」ということであり、永遠の命を授けて頂くということでもあると思います」と述べられています。

7. 平成 29 年新年ご挨拶:四代様は、「主神の創造のみ旨は、ご自身の子をお生みになることであります。そのために、私どもの中におられる主神は、すべての創造をお始めになる前に、まず、ご自身の天国を用意され、その天国に於いて、万物の霊と共に、人間となるべき霊、すなわち、ご自身の分霊を、予めお生みになりました。この時、主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前がメシヤである、と私は信じています。(中略)主神が個々別々の自我意識を持つ人間を創造されたのは、万物と一体である私ども一人ひとりを再び天国に迎え入れ、主神の御業を継承し、主神に仕える者、すなわち、主神ご自身の子・メシヤとして新しく生まれさせるためです」「(中略)このように、明主様は、観世音菩薩(観音)の本体であり実体がメシヤであることをお示しく下さいました。私は、明主様にとりまして、『観世音菩薩』という御名を始めとする数々の御名は、今や、「メシヤ」という御名に包含され、融合されていると思います。(中略)そして、六月十五日、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行され、主神の子として新しく生まれるという、例えようもない喜びがあることを私どもにお示しく下さいました。このメシヤとして新しくお生まれになった明主様が、私ども一人ひとりの中におられるのです。その明主様が今、私どもの中で、“わたしを模範とするように”と訴えていらっしゃるように思えてなりません」と述べられています。

8. 平成28年11月30日教主様といづのめ教団教区長との懇談会:四代様は、「『全く新しい信仰に目覚めよう』というように、まったく新しい、という言葉を使わせて頂いているのは、今まで我々が気付かなかったことがある、ということですよ。我々は、今までは、この世だけで生きている感じでしたからね。それに、さっきも言ったように、人間の営みと神様の営みを分けているような考え方、霊と肉、天国と地上。そうやって分けていた考え方。あるいは、自と他を分けていた考え方、でも、そうじゃなくて、神様は全部の中に入らっしゃっている。全部を包んでいらっしゃるんだと。全部を包含していらして、全部の中に入らっしゃると。何にも区切りがないんだ、全部をお使いになっているんだと。自分の良い心も悪い心も、良い面も悪い面も至らない面も、全部をお使いになっているんだと、というふうにもし気づかせていただけたら、その気づいた瞬間、感覚、感触としては、「新しい」という感じがしますでしょ。「全く新しい」と感じる。(中略)でも結局は、「新しい」といっても、思い出すことなんですよ。だって、我々は天国に居た時に、元々神様から神様の意識を継承させて頂いていたんですから。だから全部『私』の中には入っているんですよ。一人ひとりの中にインプットされているんですよ。霊の体の中にインプットされているんですよ。だから、それを思い出す、という感じが大切なんですよ。でも、我々はこの世の中で生きているからなかなかそのように思えない。でも、『あっそうだ、そうだ』という感じで、『なんだ実はそういうことだったのか』と思い出すようにして気が付く姿が『新しい』ということだと思うんです。新しいと感じるのは、さっきも言ったように、いわば、神様が我々の心を獲得してくださっている姿になるんです」と述べられています。

9. 平成30年月4日 主之光教団春季大祭・豊穰祈願祭教主様ご挨拶:四代様は、「すべては主神から出て、主神に帰る。これが創造の御業です。主神は地上で個々別々の自我意識をもたせた私どもを、今度は万物と共に再び天国に迎え入れ、ご自身の子としてもう一度生まれさせてくださるうとしておられます。そして、その天国で私どもと共に、住んで下さり、常に新しい創造のみ旨に私どもをお使いになろうとしておられます。このようにして地上の全てが、天国に立ち返って、天国と一つになり、主神にお仕えさせていただくことが本当の意味の地上天国建設、すなわち主神の創造の御業なのではないでしょうか」と述べられています。

と地獄(霊層界)の天国ではない」と言われています。信者も専従者も、その正確な意味を理解していません。四代様に言われる「始まりの天国」も「神の国」も絶対善の世界であり、悪(曇り)は一切存在しない世界なのです。従って、「始まりの天国」は、浄化の必要がなく、不幸も存在しない。霊層界も存在しない。副守護神も正守護神も存在しない世界なのです。しかし、明主様は、これとは全く異なる天国観を御教えされています。つまり、天国は第一天国、第二天国、第三天国から成り立っており、「第三天国の神々は、中有界から向上し神格を得たのであるから、人間に最も近似しており」(霊界叢談・天国と地獄・昭和24年8月25日)、霊層界において人間が行ける最高の位置(霊籍)は第三天国までである旨、御教え下さっています。第一天国どころか、第二天国にも行けない人間が、どうして「始まりの天国」に行けることが出来るのでしょうか。このことについて、四代様は何の説明もされていません。明主様は、霊層界の上方に行くこと、つまり霊籍を向上させることが「天国に近づく(救われる)」ことだと説かれています。しかし、四代様はこのことを明らかに否定されています。そもそも、四代様のお言葉の核心をなす「主神が『始まりの天国』において私たちを生み、その時にメシヤという名前を授けて下さった」という論理が本当に成り立つのか、教育的な根拠を吟味する必要があります。

【「浄霊観」について】		
明主様のご神書(御教え・教典・岡田茂吉全集)	四代教主様のお言葉	いづのめ教団対策本部事務局としての見解と根拠
<p>『御教えの要旨』</p> <p>① 明主様は、「浄霊は、幸福を生む方法であり、不幸の原因は霊の曇りである。不幸の最大の原因は病気であり、病気に対する恐れが解消されれば、人間は幸福になる。病気の原因は、霊体の曇りによって生じる。その曇りの原因には2種類あり、一つは霊自体に発生する曇りと、二つ目は体から移写される曇りである。(注:平成17年発行版「天国の礎」浄霊上142頁;「結核の革命的療法」昭和26年8月15日)。したがって、浄霊は、霊体一致と霊主体従の原則に基づいて、「霊体と現(肉)体の両面の救い」を目的として行われる」と説かれています。(注:「病気が治ればいい」昭和28年3月18日)。(根拠資料1、2)</p> <p>② 明主様は、「浄霊の本源」は、霊界における観世音菩薩の如意の珠から、私に向かって発せられる無限力が明主様の腹中の「光の塊」に入り、そこから放射される無限光で、これを観音力あるいは不可思議力、妙智力と言うであると述べられています。(根拠資料3)。つまり、その力の本源は、観世音菩薩が具有され、一人の超人(明主様)を機関として浄化力となり、救世の大本願の達成に努められている」とされているのです。(根拠資料3、4)。</p> <p>③ 明主様は、「浄霊の観音力は、凡ゆる病気を治し、貧乏を無くし、争うを無くする力、不幸と罪の原因を、はっきりさせて、その原因を取り除く力」で、「一個の人間の肉体を通して、働きかけるという力」であると説かれています。(根拠資料1、2)</p> <p>④ 明主様は、「浄霊は、「霊体の曇りを解消するのを根本」としており、その方法としては、「施術者の手指から火素が主である一種の霊波を放射させる」のであると述べられています。さらに、「浄霊によるこの神秘線なる光線は何人といえどもある程度の量を有しているのである、というよりも、その光線はこの地球上の空間否霊界に無限に遍満している」と論されています。(根拠資料5)</p> <p>⑤ 明主様は、フランスのパリ・マッチ誌主筆レモン・カリティユ氏との対談(昭和27年6月22日、天国の礎 宗教上、336ページ)の中で、「ですから、弟子にお守りをあげます。お守りを首にかけますと私の身体からお守りに、霊線—光の繋がり—それは目に見えないが、その人の身体から一種の光が出て、それで病気が治る」と述べられ、さらに別のところでは、「療術せんとするとき、観音力の御守りを首に懸けるべし。この御守りこそ、無限に発揮する、観音力の根源にして、これのみは科学にても、人智にても説く能わざる不可思議なるものである。」と述べられ、御守り(お光)とそれを身につける意味を説かれています。(根拠資料6)</p> <p>⑥ 明主様は「余の許しを受くれば、其人の霊体を通じて発揮する観音力に依って、驚くべき治病能率を挙げ得る」とされています。つまり、言い換えれば、明主様の許しがなければ、「人類救済」のための「観音力」を發揮することはできない、ということであります。「おひかり」は、明主様からお許しを戴いている「証」なのだとも明主様は明言されています。すなわち、「おひかり」は、観音様が「観音力」を發揮するためには絶対に外せない、ということを明確にお説きになっているのです。(根拠資料7)</p> <p>⑦ 明主様は、「明主様が書かれた『ひかり』の文字の紙片を『お守り』として身につけることによって浄霊の効果が發揮される。それは、この『ひかり』の文字から光の文字の墨色から強力な光波が放射し、術者の身体から腕を通して掌から放射されるのである。それは、私の体から霊線を通じ個々の光の文字へ一瞬にして伝達するのである」とされ、術者はこのお『ひかり』のお守りを身につけない限り、観音力は発揮できないと御教えされています。(根拠資料8)</p> <p>『明主様の「浄霊」についての根拠資料』</p> <p>1. 昭和26年9月26日浄霊の発明的価値、「御神書」第三巻・浄霊(上)394頁:明主様は、「浄霊という言葉は、歴史上今日までなかったことは言うまでもない。勿論浄霊の言葉の意味は、信者は知り抜いているが、大体人間というものは、見えざる霊と見ゆる体の一致によって成り立っているものであって病気の因は霊に曇りが生じ、それが体に映るのであるから、その曇りを除けばすべての病気が治ってしまうのである。これは理屈ばかりではない。事実私の信者数十万人が、今まで何百万人の病気に苦しむ者を治したか知れないので、医学とは比べものにならない程の、驚異的效果を挙げているのであるから、之こそ世界的一大発見といっても、決して過言ではないのである。人類史上今日まで、幾多の偉大なる発明発見はあったが、これと比較し得るほどのものは、未だかつてなかったことは言うまでもない。何といってもこの発見の価値は人間の生命の問題であって、これ以上の重要なものはないからである」と説かれています。</p> <p>2. 昭和27年3月25日浄霊と幸福、「天国の礎」第二巻・宗教下54～56頁:明主様は、「浄霊</p>	<p>『お言葉の要旨』</p> <p>① 四代様は、『「主神の燦然と輝く大光明」が浄霊の本源であり、浄霊を行うことは、「主神の大光明が輝き、赦しと救い」が私たちに「すでに及んでいること」を「私どもが知る」ために必要なものである』、と説かれています。つまり、浄霊は私たちが主神の大光明を知るために必要なものであるとされています。(根拠資料1)</p> <p>② 四代様は、浄霊をする時に手をかざす意味について、「それは、主神の燦然と輝く大光明が天地万物一切を貫き、すべての人々の心の奥底にまで到達し、ご自身がお赦しになり、お救いになったすべてのものを、その力強く大きなみ手の中に、私どもを通してお受け取りになっていること、そのことを私どもが知る必要があるからです」と説かれておられます。(根拠資料2)。</p> <p>③ また、四代様の意を汲んだ真明氏は、「明主様の教えてくださった浄霊の姿というのは、本当は、神様の愛の形だと思ふんです。神様の愛の形を人間の身体で表現したら浄霊をしている姿になった」と言い、「神様はなぜ我々に向かって手をかざしておられるのか。それは、神様は、万物も含めた全人類を、全部ご自分の手の元に集められたい、天国に迎え入れたい」、ということだと述べて、それがご浄霊のたった一つの意味だと断言されています。(根拠資料2)。</p> <p>④ さらに真明氏は、浄霊というのは、「全人類と共に本物の聖地である天国に立ち返る」ということだから、ちょっとしたことでもいいと思ふんです。たとえばトイレに行ったときでも、“自分の心と思いと精神に、怒りとか不安とか、いろいろな思いが集まってきております。この思いを捧げさせていただきます。明主様を通して、主神に帰させて頂きます”、って一瞬させて頂ければいいと思ふんですね。10秒ぐらいでもいいと思います」と述べています。だから、トイレに行くときとか、歯を磨くときとか、夜寝る前とか、夕拝の時に、ちょっとそういうふうにさせて頂く、というのが、実際に手をかざさなくても、浄霊の業そのものにお使い頂いている姿になり得るんですよ。「これからは想念だ」と明主様はおっしゃったわけですから、これくらいのことはさせていただく必要があるのかな、と思う」と、まさに信徒が聞く腰を抜かすような驚愕の発言をされています。(根拠資料2～4)。</p> <p>⑤ 四代様は、「浄霊は、神様がいつもなさっている。神様は、一瞬たりとも我々に対して浄霊をされていない時はない。浄化をされていない時もないです。そのことに気づかせるために人間にも手をかざす浄霊を教えてください」とし、「神様の光はすべてに行き渡ったんですよ、すべてに行き渡った光であり命を、今度は自分の元にお受け取りになるために、我々にも、浄霊の手をかざさせてくださっている。そういう神様の業に早く気づいて欲しいために、浄霊をさせて頂いているのだ」と、驚きの主張をされています。一方、真明氏も、「我々は本当に浄まっているんだ、心が感じる事が出来るというだけで、もう完全に人類は浄まっている。浄まっていない人は誰一人いない」と述べています。(根拠資料4、5)</p> <p>⑥ 四代様は、「浄霊は、主神のご意志のもとにある、主神の御業です。私どもが明主様から浄霊の御業を教えられているのは、私どもが自分の中に、相手の中に、そして、すべての人々や万物の中に、主神の真の光がすでに到達していることを認め、すべてのものと共に、光の源である天国へ立ち返らせて頂くためである」と主張されています。(根拠資料6)</p> <p>⑦ 四代様は、「浄霊と言っても、やっぱり想念を中心にしなないといけないと思いますよね。だって、手をかざさなくても神様は我々一人ひとりの中で浄霊をしてくださっているんですから、手をかざさなくてもいい」と述べられています。(根拠資料7)</p> <p>⑧ 四代様は、『「おひかり」は、私どもが皆、自分の命は主神の永遠の命であり、自分の中心に主神の永遠に輝く光を賜っていたことを忘れることなく、しっかりと胸に刻んでおくためのものでもであると述べられています。また、「おひかり」は、光の源である天国へ立ち返らせて頂くためのものとして発言されています。さらに四代様は、おひかりは「すでに自分も相手も、溢れんばかりの光に満たされていることを知るためのもの」、と述べて、私たちが胸に頂く「おひかり」は、そのことを知るためのものだ、と述べられています。(根拠資料8)</p> <p>『浄霊についての四代様のお言葉の根拠資料』</p> <p>1. 平成28年8月1、2日世界平和祈願祭・祖霊大祭:四代様は、「私どもは、浄霊をさせて頂くとき、手をかざしますが、それは主神の燦然と輝く大光明が天地万物一切を貫き、すべての人々の心の奥底にまで到達し、ご自身がお赦しになり、お赦しになったすべてのものを、その力強く大きな御手の中に、私どもを通してお受け取りになっていること、そのことを私どもが知る必要があるからと思います。ですから、私どもが、万物をはじめすべての人々の中</p>	<p>① 浄霊の本源について</p> <p>明主様は、腹中に「お光の玉(如意宝珠の珠)」であると明言され(明主様根拠資料1)、霊界における観世音菩薩の如意の珠から、それに向かって発せられる無限力が無限光(観音力)となって、我々に放射されると説かれています。つまり、浄霊の「力の本源」は、最高最貴の神の御魂が明主様の腹中の如意の宝珠に宿られて、その「お光」の「力」とされているのです。(天国の礎 宗教篇上 17～20 ページ)。したがって、世界救世教では、「教主の座」を「座」ならしめるものは、この腹中の「光の珠」(あるいはその御力)をその者が継承して行くかどうかということにあるのです。「光の玉」は二代様も三代様も「教主の座」に在ると言われています(御講話集・教師向・於関東教務支所二代様お言葉・昭和35年5月17日、三代様お言葉より・昭和60年5月12日)。明主様の信仰をきちんと継承している「証」がこの「光の玉」(あるいはその御力)であり、それを継承する「教主の座」があるからこそ、「神的順序」が守られ、明主様の御教えと信仰の伝達者としての役割が果たせるのです。しかし、浄霊の力の本源である「光の玉」(あるいはその御力)について、四代様は「教主の座」に在る者として、これまで一度も言及されていません。また、四代様は、浄霊は主神の御業であるとされ、その本源は、「主神の燦然と輝く大光明」である述べております。(四代様根拠資料1)。これは、浄霊は明主様の御業、その本源は明主様の腹中の「光の玉」とする御教えとは全く異なるものです。</p> <p>② 浄霊の本義と目的について</p> <p>明主様は、浄霊は、1. 不幸の原因の病気を取り除くこと、2. 心身共に健康な人間を作ること、3. 霊体の曇りを取り除くこと、4. 霊主体従と霊体一致の法則に従うこと、5. 霊体と肉体の両面の救いであること、6. 宗教と科学の両建ての救いであること、7. 物心両面の救いであること、8. 自然良能力を強化・促進するものであること、等を明確に説かれています(明主様根拠資料1、2、4)。三代様も、「ご浄霊を以って世界の救い、それは一代や二代ではなかなかかなわぬような息の長い道です。しかし、地上天国に通ずる絶対の道であり、しかもそのための浄化は不可欠です」「ご浄霊をどこまでも信仰の生活の中心に、また諸活動の中心に据えて、徹底していくところに第二の創業、明主様に直結する道があり、世界布教への道がある」と述べられ、浄霊の意義を説かれています。(参考資料①)。しかし、四代様は、浄霊は「主神の大光明が輝き、赦しと救い」が私たちに「すでに及んでいること」を「私どもが知る」ために必要なもの」とされ、そのことを認めて「天国に立ち返らせていただくもの」と説かれています。(四代様根拠資料1、2)。その上で、「浄霊のたった一つの意味は、神様が万物を含めた全人類をご自分の手元に集め、天国に迎え入れるためだけにある」と説明されています。四代様のこのお言葉は、御教えにある浄霊の本義・本義・目的とは明らかに異なっています。世界救世教にとって生命とも言える浄霊の本義・目的について、「教主の座」にある四代様が、懇談会などとは言え、教導の立場で客観的な根拠もなく恣意的な発言をされることは、個人的な見解には到底なり得ず、不適切と言わざるを得ません。もし教主が、救世教の根幹に関わるような重大発言をされるのであれば、当然のことながら、その発言内容の正当性、妥当性を立証する客観的根拠を示した上で、然るべき機関で厳正かつ慎重に吟味された上で発信されなければなりません。四代様が「教主の座」に在る限り、客観的根拠のない独断的な発言をすることは決して許されることではなのです。</p> <p>③ 「霊の曇り」を取る浄霊について</p> <p>明主様の説かれる「霊」と「体」の関係から見れば、「人間は現世と前世の生き方から「曇り」を生じます。これを浄めて人間を『病貧争』から救うのが浄霊の御業です」と説かれています。(明主様根拠資料5)。しかし、四代様の意を汲んだ真明氏は、「“もっと浄まりなさい”と言われてきたということですが、本当は我々は“浄まっている”んですよ。心が感じる事が出来る”というだけで、もう完全に全人類は浄まっているんですよ。浄まっていない人は誰一人いないんですよ」と発言をしています。(四代様根拠資料5)。仮に、真明氏の言うように、「心が感じる事が出来るというだけで、全人類が浄まっている」とするならば、霊の曇りは感じただけで消えるということになり、浄霊の御業も不要ということになってしまいます。そうなれば、病貧争絶無の地上天国を建設するための御業である浄霊の意味合いもその在り方も根底から覆ることになり、世界救世教の根幹を揺るがす大騒動に発展する可能性があります。四代様や真明氏が如何なる意図があつて、どのような根拠があつて、このような発言をされるのか理解できませんが、あまりにも乱暴で無責任、不適切な発言であると断ぜざるを得ません。包括法人として、教学的な観点からも厳正かつ迅速に対応すべき重要課題であると思ひます。</p>

とは幸福を生む方法である」「不幸の原因はまったく霊の曇りであるのは、あまりにも明らかである。それを簡単にして確実な方法こそ、霊の曇りの解消法としての浄霊である」「幸福になるにはどうしても霊を淨めて軽く、少しでも上位になるよう心がくべきで、それ以外に方法は絶対にないので、ここに浄霊の大いなる意義がある」と述べられています

3. 天国の礎、浄霊篇上「浄霊の原理」121－134ページ:明主様は、浄霊の力の本源と原理について、「この玉の光の塊から光波は無限に放射されるのである。しからばこの光の本源はどこにあるのかというと、これが霊界における観世音菩薩の如意の珠から、私に向かって無限光を供給されるのである。これすなわち観音力であり、不可思議力妙智力とも言われるものである。」と述べられています。

4. 昭和10年9月15日「病貧争絶無の世界を造る観音運動とは何？」、岡田茂吉全集著述篇第一巻168頁:明主様は、浄霊の力の作用と本源について、「凡ゆる病気を治し、貧乏を無くし、争いを無くする力、不幸と罪の原因を、はっきりさせて、その原因を取り除く力、それは、光、力の浄化作用である。日月の光が、一個の人間の肉体を通して、働きかけるという力は、実に空前の事象なのだ。」(中略)然らば、其の光は一体何処にあるのか、それは、観世音菩薩が具有され、一人の超人を機関とされて、救世の大本願の達成に努められているのだ。其の力を観音力と言う。」と述べられています。

5. 昭和15年4月2日「霊的医術」:明主様は、「本療法(浄霊)においては、霊体の曇りを解消するのを根本とする。その方法としては、施術者の手指から火素が主である一種の霊波を放射させるのである。(中略)そうしてこの神秘線なる光線は何人といえどもある程度の量を有しているのである。というよりも、その光線はこの地球上の空間否霊界に無限に遍満しているのである。」と説かれています。

6. 岡田茂吉全集著述篇第1巻185頁:明主様は、「療術せんとするとき、観音力の御守りを首に懸けるべし。この御守りこそ、無限に発揮する、観音力の根源にして、これのみは科学にても、人智にても説く能わざる不可思議なるものである」、と説かれ、「お光の玉」の「お光り」無くしては、世界救世教の根幹である「人類の救済」はなし得ないとされています。

7. 日本医術講義録第1篇昭和10年、岡田茂吉全集著述篇第1巻p182-183:明主様は、「此療法(注:浄霊のこと)の創成は、主神が、人類の最も苦悩とする病気疾患を根絶せんとし給う御目的に出でたるものにして、その御目的遂行の為、表現仏たる観音の霊体を通じ、仁斎(注:明主様のこと)に肉体を活用させ、茲に、神人合一的大能力を発揮するに到ったのである。此大偉業の神命を受けたる余(注:明主様のこと)は、爾來、七年間、凡ゆる病者に接触、研磨修練を経、その間、観世音より、幾多の靈示を享けたる結果、従来の医学の、殆ど夢想だもせざる治療成績を挙げ得たので、茲に、日本医学の新しき名の下に、人類救済の根本的大経綸を開始する事になったのである。而(しこう)して、此療法は、何人が修得すると雖も、余の許しを受くれば、其人の霊体を通じて発揮する観音力に依って、驚くべき治病能率を挙げ得るのである。」と説かれています。

8. 天国の礎浄霊篇上巻126－128ページ:明主様は、「私は浄霊の方法として現在行っている方法は、光の文字を大書した紙片を当たれるのである。それをお守りとして懐へ入れることによって効果を発揮する。それは光の文字の墨色から強力な光波が放射し、術者の身体から腕を通して掌から放射される。この放射力は数尺ないし数間くらいが最も適当としている。そうしてこの光の文字から光波が放射されるということは一体いかなる訳かということ、私の体から霊線を通じ個々の光の文字へ一瞬にして伝達するのである。ちょうど放送の無線電波とよく似ている。私の霊体から、霊線を通じて光波が放射するとすれば、一体私の霊にはどういう仕掛けがあるかということになるが、それを知ることによって疑いは解けるわけである。それは私の腹中に平常は二寸くらいの光の玉がある。これは見た人もある。この玉の光の塊から光波は無限に放射されるのである。しからばこの光の本源はどこにあるかということ、これが霊界における観世音菩薩の如意の玉から、私向かって無限光を供給されるのである。これすなわち観音力であり、不可思議力妙智力と言われるものである。如意輪観音が持し給う玉もこれである」と説かれています。

に主神の大光明が輝き、赦しと救いがすでに及んでいることを認め、その栄光を携えて、全てのものと共に自らを主神に委ねさせていただくという想念の御用そのものが、主神が最もお喜びになる浄霊の御用なのではないでしょうか。」と述べられています。

2. 「いづのめだより」Vol.1:四代様は、「私どもは、浄霊をさせていただく時、手をかざしますが、それは、主神の燦然と輝く大光明が天地万物一切を貫き、すべての人々の心の奥底にまで到達し、ご自身がお赦しになり、お救いになったすべてのものを、その力強く大きなみ手の中に、私どもを通してお受け取りになっていること、そのことを私どもが知る必要があるからであると思います。ですから、私どもが、万物を始めすべての人々の中に主神の大光明が輝き、赦しと救いがすべてに及んでいることを認め、その栄光を携えて、全てのものと共に自らを主神に委ねさせていただくという想念の御用そのものが、主神が最もお喜びになる浄霊の御用なのではないでしょうか」と主張されています。

3. 平成28年1月29日真明氏と若手専従者の第1回懇談会:四代様の意を受けた真明氏は、「明主様の教えてくださった浄霊の姿というのは、本当は、神様の愛の形だと思えます。神様の愛の形を人間の身体で表現したら、浄霊をしている姿になった、ということですよ。じゃあ神様の愛とは何か。神様はなぜ我々に向かって手をかざしておられるのか。それは、神様は、万物も含めた全人類を、全部ご自分の手の元に集められたい、天国に迎え入れたい、ということですよ。それがご浄霊のたった一つの意味ですよ。神様が、「天国へ迎え入れる」とおっしゃって、全人類を浄霊していらっしゃる姿を、明主様が、我々の代表としてあいう形として表現して、教えてくださったんだと思えますよ。だから、浄霊というのは、「全人類と共に本物の聖地である天国に立ち返る」ということですよ。だから、ちょっとしたことでもいいと思えます。たとえばトイレに行ったときでも、“自分の心と思いと精神に、怒りとか不安とか、いろいろな思いが集まってきております。この思いを捧げさせていただきます。明主様を通して、主神に帰させていただきます”、って一瞬させて頂ければいいと思えますよね。10秒ぐらいですよ。それくらいでいいと思います。というのは、いろいろな御用に没頭している時って、そんなことを思う余裕もないじゃないですか。だから、トイレに行くときとか、歯を磨くときとか、夜寝る前とか、夕拝の時に、ちょっとそういうふうにさせて頂く、というのが、実際に手をかざさなくても、浄霊の業そのものにお使い頂いている姿になり得るんですよ。これからは想念だ、と明主様はおっしゃったわけですから、これくらいのことはさせていただきます必要があるのかな、と思います。また、実際に形の上でご浄霊させて頂く時も、同じことを確認させて頂ければ良いと思えますよね。霊主体従なわけですから、体で浄霊をさせていただく、ということは、霊での浄霊があるわけですよ。誰が霊の浄霊をされているかって言ったら、やはり神様ですよ。 “神様が今全人類を迎え入れておられますね”と確認しながら浄霊をさせていただければよいのかな、と思います」と述べられています。

4. 平成28年6月24日 岡田真明様と若手専従者との懇談会第5回:真明氏は、「浄霊は、教主様が何度も何度もご教導くださるようになり、基本は、我々一人ひとりの中で、神様が、我々に対して、ご自身の御手を伸ばして全人類を救い上げておられる業である、ということですよ。神様が我々に対して浄霊して下さって、私のもとに帰ってきなさい、という思いを込めた赦しの光を注いでくださっている。それは、人間が手をかざしようともいまいとも、神様のほうとしては24時間常に我々に浄霊をしてくださっている。そのことを我々一人ひとりが思い出すために、我々も、人に対して浄霊をさせていただいている、と思えますよね。それが、手から光が出て病気を治す、ということばかりに焦点が当たってきてしまった、と思えますよね」と語っておられます。

5. 平成28年1月29日真明氏と若手専従者との懇談会:四代様の意を受けた真明氏は、「それと、“もっと浄まりなさい”と言われてきたということですが、本当は我々は“浄まっている”んですよ。“心が感じる事が出来る”というだけで、もう完全に全人類は浄まっているんですよ。浄まっていない人は誰一人いないんですよ」と述べられています。

6. 平成28年12月22～23日 御生誕祭挨拶四代様は、「私どもが浄霊をさせていただく時、相手に光を分け与え、相手を光で満たそうと思うのは、相手の中に光がないのではなく、すでに自分も相手も、溢れんばかりの光に満たされているからです。浄霊は、主神のご意志のもとにある、主神の御業です。私どもが明主様から浄霊の御業を教えられているのは、私どもが自分の中に、相手の中に、そして、すべての人々や万物の中に、主神の真の光がすでに到達していることを認め、すべてのものと共に、光の源である天国に立ち返らせて頂くためなのではないでしょうか」と説かれています。

7. 平成28年11月30日教主様と教団教区長との懇談会:四代様は、「浄霊について、我々の理解する浄霊と言うのは、明主様の時代もそうでしたし、二代様、三代様と来て、ずっと我々は、浄霊で病気を治す、ということでした。だけど僕は、浄霊について、何年間もそんな話はありませんよ。浄霊で病気が治る、という話はしていませんよ。それで、明主様ご自身がお昇天間際に側近奉仕者に度々おっしゃったのは、悔い改めなきゃいけない、ということもあったんだけど、それと、これからは想念だと、浄霊は二の問題だと、こうおっしゃってるんですよ」と述べられています。(中略)さらに「明主様ご自身、脳溢血で倒れた後、ご自分で

④ 浄霊の意義を説かれた明主様の御教えの根幹

明主様は、「人間には三つの守護神、すなわち、神の分霊としての『本守護神』、祖霊から選ばれた『正守護神』と動物霊などの『副守護神』が宿っている。人間は『悪』を司る副守護神の働きを弱めるために、『絶対善』である本守護神の働きを強めるようにしなければならない」、と説かれ、そのための信仰であるとされています。しかし、それでも明主様は「悪」である副守護神を完全には否定されていません。本守護神と副守護神の葛藤においての、副守護神の役割も認めておられます。こうした深い人間観のもとに、明主様は様々な御教えを場面に応じて私たちにお示しくださっているのです。「浄霊」でなぜ浄めなければならないか、それは浄めるべき曇りが人間(霊体と肉体)には現世での暮らし、前世での祖先たちの暮らしにより不作為に溜まっていくからです。明主様の御教えの根幹は「霊」と「体」にあり、その「霊」の世界「霊層界」や「三つの守護神」、「霊籍」を認めなければ、世界救世教そのものが成り立ちません。四代様は、本守護神、正守護神、副守護神には全く触れずに「神の子」「分霊」の部分だけを取り上げ、「主神のみがおられる」として、主神を常に強調されています。明主様の御教えでは、主神を頂点とし、上級から下級の神があり、さらに正神も邪神もあります。一神にして多神です。一神教ではありません。御教えの根幹に関わる四代様のこうした考え方は、世界救世教を大きく変質させ、信徒の知らない別個の世界(宗教)に導いていく恐れがあります。

⑤ 「お光り」の意味について

明主様は、「療術せんするとき、観音力の御守りを首に懸けるべし。この御守り(お光り)こそ、無限に発揮する、観音力の根源にして、この『光の玉』の『お光り』無くしては、世界救世教の根幹である『人類の救済』は成し得ない」と、「お光り」の意味合いと在り方を明確に説かれています。(御教え根拠資料6)。つまり、「お光り」は観音力の根源にして、明主様からお許しを戴いている「証」であり、首にしっかりと懸けるべきものなのです。このように、明主様は「おひかり」の本源とその力(観音力)が発揮される原理や意味についても明解な説明をされています。一方、四代様は、「光の玉」「お光り」は、私どもが皆、自分の命は主神の永遠の命であり、自分の中心に主神の永遠に輝く光を賜っていたことを忘れることなく、しっかりと胸に刻んでおくためのもの、光の源である天国へ立ち返らせて頂くためのもの、そしてすでに自分も相手も、溢れんばかりの光に満たされていることを知るためのもの」(根拠資料6)とされ、御教えにない抽象的な独自の主張をされています。これは、明主様の御教えの根幹を成す浄霊を蔑ろにし、眨める主張に他なりません。

⑥ 浄霊のときに「手をかざす」ことの意味について

明主様は、浄霊をするとき手をかざすのは、霊体の曇りを解消するためには、施術者の手指から観音力を相手に放射するために必須であり、手をかざさなければ観音力を相手に放射することはできないと明言されています。しかし、四代様は「浄霊は神様がいつもなさっている」「心で感じるだけで、人類はもう完全に浄まっている、浄まっていない人間は一人もいない」とした上で、浄霊の時に手をかざすのは、「主神の大光明が人々の心に到達し、主神がお赦しになり、お救いになり、それらを主神がお受け取りになっていることを私たちが知るため」のものであり、「神様がいつも浄霊をなさっていることを気付かせるために手をかざすことを教えてくださっている」のであると、驚くべき主張をされています。(四代様根拠資料4, 5)。こうした四代様の発言は、明らかに明主様の御教えされた浄霊を軽んじるものに他なりません。世界救世教は「明主様の権威」、「御教え」、「浄霊」で確立している世界であることを考えると、四代様のこうした発言は、世界救世教そのものの否定に繋がる暴言であると思われるます。

⑦ 「想念」と「浄霊」について

四代様は、「これからは想念が大切だ」、「想念の御用そのものが主神の最もお喜びになる浄霊」(四代様根拠資料1、2、平成28年8月12日世界平和祈願祭・祖霊大祭)、「想念さえあれば浄霊は不要」、「手をかざさなくて良い」(根拠資料7)、「これからは想念なんだ。浄霊は二の問題だ」(根拠資料7)等々、浄霊よりも想念が大切、浄霊は見直すべきだと、いろいろな機会をとらえて主張されています。また、四代様は、明主様が昭和29年に「これからは想念なんだ。浄霊は二の問題だ」と言われたとして、浄霊を軽視するような発言も繰り返されています。しかし、明主様が果たしてこのような趣旨の発言をされたのか、少なくとも御教えにはまったく見当たりません。四代様のこの発言は、恐らく、昭和30年の「地上天国」第68号に掲載された「碧雲荘奉仕者を困んで」という懇談会記録の中の、1奉仕者(樋口ヒメさん)の発言をもとに、そう述べられたものと推察されます。もしそうであるならば、この記事を読む限り、「これからは想念なんだ」「浄霊は二の問題だ」との発言だけを殊更取り上げて強調するような内容ではないことは一目瞭然です。なぜなら、この発言の前後には、浄霊で御守護頂いた事例が存在しているからです。この懇談会の内容を見ると、明主様は確かに想念の重要性は説かれています。それ以上に浄霊の大切さを諭されていることが窺えます。また、四代様が強調される「浄霊は二の問題だ」という四代様の発言は、意味がきわめて曖昧で、浄霊は「第二番目」という意味なのか、「想念とは別物」という意味なのか、判断と

一生懸命自己浄霊されていた。それでどうなった。亡くなったじゃないですか。ご昇天された。当時、熱海の街中でもね、『浄霊で病気が治る、と言ってたのに、なんだ自分さえ治せなかったじゃないか』という声が出て、我々信者は、皆誰も何も言えなかった、ということも聞いてますよ。二代様も若くして亡くなられたし、あの浄霊、浄霊と仰っていた渡邊先生、お若くして亡くなりましたよね。いや、その、寿命のことを言っているわけではないよ。長生きすればいい、ということでもないよ。人間の寿命は色々あるし、いちいちそんなこと、一概に何とも言

えない。でも、結局、明主様が浄霊で治られなかったということは事実ですよ。我々は、どうしてその事実をいまだに受け止めないのかなと、そう思うんですよ」と、述べられています。

8. 平成24年御生誕祭: 四代様は、「おひかり」のことを「私どもが皆、自分の命は主神の永遠の命であり、自分の中心に主神の永遠に輝く光を賜っていたことを忘れることなく、しっかりと胸に刻んでおくためのものでもある」と述べられています。

しません。明主様の説かれた浄霊は「明主様を信ずる力」と「被浄霊者への想いの強さ」、つまり「想念」が絶対に必要だとされています。つまり、「浄霊」と「想念」は密接不離の関係にあり、「想念」なくしての「浄霊」はあり得ません。これを切り離して考えてはいけない問題なのです。世界救世教の根幹にある浄霊の本義について、言葉だけが独り歩きし、誤解を生じるような発言は絶対に避けなければなりません。四代様の意を汲んだ真明氏が若手専従者との懇談会(平成28年4月14日)等で、「救世教は浄霊が命とは言えない」といった発言をされていますが、

極めて不謹慎な発言です。明主様のご神業の根幹をなす「浄霊」について、明主様のご聖業を継承すべき「教主の座」にある四代様が、このような「浄霊」を軽んじるような、あるいは否定するが如き発言をされることは、きわめて不穏当、不適切であり、決してあってはならないことだと考えます。

⑧ 明主様の浄化と浄霊

四代様は、「明主様が脳溢血で倒れられた後、ご自分で一生懸命自己浄霊されていた。だけど、医学的に言えば、明主様の病気は治らなかったですよ。それで、どうなった。亡くなっちゃたじゃないですか」と度々発言されています。(根拠資料7)。多くの信徒から見れば、とても乱暴なお言葉だと思います。明主様のご昇天を信徒としてどう受けて止めて行くのか、「教主の座」に在る者は、明主様の「死」に常に真剣に向き合っていかなければならない立場にあるはず。また、四代様は、「当時、熱海の街中でもね、浄霊で病気が治る、と言ってたのに、なんだ自分さえ治せなかったじゃないか、という声が出て、我々信者は、皆誰も何も言えなかった、ということも聞いてますよ。二代様も若くして亡くなられたし、あの浄霊、浄霊と仰った渡邊先生も若くして亡くなりましたよね。いや、その、寿命のことを言っているわけではないよ。長生きすればいい、ということではないよ。人間の寿命は色々あるし、いちいちそんなこと、一概に何とも言えない。でも、結局、明主様が浄霊で治られなかったということは事実ですよ。我々は、どうしてその事実をいまだに受け止めないのかと、そう思うんですよ」と述べられています。(根拠資料7)。四代様のこうした発言は、明主様の浄霊を信じて救世教の信徒になっている人、現在病気に苦しんで明主様のお力におすがりしている人達への思いやりをまったく感じさせない信じがたい暴言と言わなければならない。教主の座に在る者の言葉として、きわめて不穏当、不適切な発言であり、到底容認できるものではなく、一般社会から見ても、明主様の血統を継ぐ者としても、教主の座に在る者としても、さらには人間としても、その見識を疑われても仕方がないような発言だと思われる。

『参考資料』

① 三代様のお言葉

◇ご浄霊をもつての世界の救い、それは一代や二代ではなかなか叶わぬような息の長いみちです。しかし、地上天国に通ずる絶対の道であり、しかもそのための浄化は不可欠でございます。浄化の度に向進していくところに救世教の信仰生活というものがあると思います。ご浄霊をどこまでも信仰生活の中心に、また諸活動の中心に据えて、徹底していくところに第二の創業、明主様に直結する道があり、世界布教への道があると、このように思っております。(三代様お言葉より、昭和60年11月9日)

【「メシヤ観」「神人合一」について】

明主様のご神書(御教え・教典・岡田茂吉全集)	四代教主様のお言葉	いづのめ教団対策本部事務局としての見解と根拠
<p>『御教えの要旨』</p> <p>① 明主様は、「観世音菩薩、光明如来、メシヤ(救世主)、弥勒神等も、御名は異なれど同一の御神霊であること」「地上天国が目前に迫りき立った今日、救いの力も決定的でなければならない。その力こそメシヤの揮わせらるる大神力である」と述べられています。(根拠資料1)</p> <p>② 明主様は、メシヤの言葉が使われた理由について、「神の啓示によって「救世教」の名を授かったが、漢字であると東洋に限られるから、どうしても全人類を救うにはそれに相応するような意味を表さなければならない、それが為に救世に「メシヤ」のフリ仮名を付けた。従って、メシヤとは救世の意味だけであって、今後の活動に適合するためのもので他に意味はないので、其の事を茲に断っておくのである。人によってはキリスト教に關係のある名称だから、時局便乗主義からと思ふかも知れないが、そういう点は些かもないのである」と述べられています。(根拠資料2)</p> <p>③ 明主様は、昭和29年4月19日に脳溢血の浄化に入られ、同年6月5日に碧雲荘の病床においてメシヤ降誕を発表、同年6月15日のメシヤ降誕仮祝典を執行、そしてその後2か月間に渡って「メシヤ様」の尊称を用いられました。メシヤ降誕の発表の折、「メシヤが生まれた」「生まれ変わるのではない」「新しく生まれた」との発表をされましたが、「主神の子」が生まれたとはおっしゃっていません。(根拠資料3)</p> <p>④ 明主様は、「このメシヤというのは、世界中で最高の位なんです。西洋では、王の王ということになっていますが、キングオブキングスと言ってそのくらいをもっているんです。だから私が出てはじめて人類は救われるんです」と述べられています。(根拠資料3)</p> <p>⑤ 明主様は、「私の腹には光の玉がある。これはある最高の神様の魂であるから、私の言動すべては神様自身が、私を自由自在に動かしているのである。つまり神と人との区別がないわけで、これが真の神人合一なのである」と明確に神人合一の意味を説かれ、自らのご神格を明言されています。(根拠資料4)。</p> <p>⑦ 明主様は、ご自分は「神格上からいって最高地位にあるので、私より上位の神様はこの世の中にないから、拜むわけにはゆかないのである」と述べられています。(根拠資料5)</p> <p>⑧ 明主様は、ご神格について「私はまた人類史上類例のない不思議な運命をもっている」「釈迦や、キリストや、マホメットなどとはまったく救世の大使命を行うべく、この世に生まれさせられた」と述べられ、「ご自身の力は、それら偉人のできなかつたことが、私にはできるのだ」と説かれています。(根拠資料6)</p> <p>『明主様の「メシア」についての根拠資料』</p> <p>1. 世界救世教の誕生に就て一開教の辞(「救世」48号、昭和25年2月5日、岡田茂吉全集著述篇第8巻324—325ページ:明主様は、「そして、祝詞にもある如く観世音菩薩、光明如来、メシヤ(救世主)、弥勒神等も、御名は異なれど同一の御神霊である以上根本は変えるのではない、いわば時期に応じて御神霊の活動範囲が拡充するのであるから、御神体も御守りも或る時期まではそのまま差支えない、」(中略)今一つは観世音菩薩は、善悪無差別的的救済であったが、愈々(いよいよ)地上天国が目前に迫りき立った、今日茲に善悪を立別け、全を育て悪を滅ししなければならない事になった、所謂悪のトドメである、従って救いの力も決定的でなければならない、その力こそメシヤの揮わせらるる大神力である」と述べられています。</p> <p>2. 岡田茂吉全集著述篇第8巻 369頁:明主様は、メシヤの言葉が使われた理由について、「神の啓示によって「救世教」の名を授かったが、漢字であると東洋に限られるから、どうしても全人類を救うにはそれに相応するような意味を表さなければならない、それが為に救世に「メシヤ」のフリ仮名を付けた。従って、メシヤとは救世の意味だけであって、今後の活動に適合するためのもので他に意味はないので、其の事を茲に断っておくのである。人によってはキリスト教に關係のある名称だから、時局便乗主義からと思ふかも知れないが、そういう点は些かもないのである」と述べられています。</p> <p>3. 昭和29年6月5日明主様お言葉:明主様は厳しい浄化の中、「ずいぶん若くなっているよ——メシヤ降誕と言ってね。メシヤが生まれたわけです。言葉だけではなく事実がそうなんです。私も驚いたんです。生まれ変わるというんじゃないですね。新しく生まれるわかですね。ところが、年寄りになって生まれるのは変ですが、一番おもしろいのは、皮膚が赤ん坊のように柔らかくなる。それからこのとおり、髪の毛が生まれたと同じような——床屋がこれを見て、子供に頭髪だと言っているんです。だんだん白いのが亡くなって、黒いのばかり</p>	<p>『お言葉の要旨』</p> <p>① 四代様は、「私どもの中におられる主神は、すべての創造をお始めになる前に、まず、ご自身の天国を用意され、その天国に於いて、万物の霊と共に、人間となるべき霊、すなわち、ご自身の分霊を、予めお生みになりました。この時、<u>主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前がメシヤであると信じています</u>」と述べられています。また、「主神が人間を創造されたのは、万物と一体である私ども一人ひとりを再び天国に迎え入れ、主神の御業を継承し、主神に仕える者、すなわち、<u>主神ご自身の子・メシヤとして新しく生まれさせるため</u>」と説かれています。また、「明主様にとりまして、『観世音菩薩』という御名を始めとする数々の御名は、今や、『メシヤ』という御名に包含され、融合されていると思います」と述べられています。そして、「メシヤ降誕仮祝典」の折、明主様は、<u>主神の子として新しく生まれる</u>という、例えようもない喜びがあることを私どもにお示しくださいました。このメシヤとして新しくお生まれになった明主様が、私ども一人ひとりの中におられるのです。その明主様が今、私どもの中で、「わたしを模範とするように」と訴えておられる」と発言されています。そして「<u>全ての人々は、神様の子ども、つまりメシヤとなるためにこの世に生まれしてきたのだ</u>」と信じていますと述べられています。(根拠資料1～3)</p> <p>② 四代様は、「<u>今までの教えを神様から出た教えとして、明主様を通して神様にお返しした方がいい</u>と思います。そうすれば、神様は、我々が始まりの天国において、<u>すでに賜っていた教えを段々と思ひ出すことができるようにして下さい</u>と思います」と述べられています。(根拠資料4)</p> <p>③ 四代様の意を受けた真明氏は、「普通メシヤっていうと、なんかとてつもなく偉い存在みたいに我々は思うじゃないですか。でも、<u>そうじゃないと思うんですね</u>。『神人合一』っていうのがありますよね。明主様はまず神人合一になられて、その後メシヤになられた、っていうことですけども、「人」の持っているもので、神様がお造りになっていない部分は一つもないですよ。だから、明主様は、自分が人と思っていた部分が実は神様のものだったんだな、ということをおられた。ということで、『神人合一』と。だから、むしろ、人間として最も謙虚な姿ですよ。」と述べられています。(根拠資料5)</p> <p>④ 四代様は、「自分の役目は、明主様が我々に気づいてほしいと強く願ってらっしゃる大切なこと、それは、明主様をお遣わしになった主神の思いだと思いますが、その思いについて、私が感じさせていただいたことを、皆さんにお伝えしなきゃいけない役目があるんだと思ってるんですね」と述べられています。(根拠資料6)</p> <p>⑤ 四代様の意を受けた真明氏は、昭和29年6月5日の明主様は『メシヤが生まれた』『新しく生まれた』『生まれ変わるのではない発言を捉え、「これはもう大どんでん返しです」と述べておられます。さらに、「明主様は『私も驚いたんです』と言われた』と言って、「それまでご自分が説かれたことを含めて、本当に全然違つたんだ、思い違いをしていたんだ」と述べられています。(根拠資料7)</p> <p>⑥ 四代様は、「私の言葉が、明主様のみ教えと違うとか、受け入れられないとか仰る方がいらっしゃいますけれども、それは、ある意味では、<u>当然のことだなあと</u>思います」そして「<u>人間を主体としてみ教えの理解をしていくと、私の言葉との矛盾を感じてしまう</u>」と述べられています。(根拠資料8)</p> <p>⑦ 真明氏は、「我々が生きているのがすべて神様の力によると認めることが出来れば、誰もが「<u>神人合一</u>」の姿になることが出来る」と発言されています。(根拠資料9)</p> <p>⑧ 真明氏は、「神様が、明主様をひな形として『メシヤ明主様』『メシヤ岡田茂吉』とされたように、分霊をもたらされた我々一人ひとりも『メシヤ誰々』という名前をくださっている」と述べられています。(根拠資料10、11)</p> <p>⑨ 真明氏は、「明主様は、神に仕える人間としての基本を、『メシヤ』とか『神人合一』という言葉で表現された」と述べられています。(根拠資料12)</p> <p>⑩ 真明氏は、「人の為にやってきたことは古いやり方で、これからは神の為という新しいやり方をしなければならぬ。そのためには、先ずは『メシヤを継承します』と、自分自身の中で一番最初に定めることである」と述べられています。(根拠資料13)</p> <p>⑪ 四代様は、「『我々がメシヤだとすると、我々一人ひとりも赦し主になるのですか』という質問がありましたが、一言で言うと『<u>そう</u>』なんです」と述べられています。(根拠資料14)</p> <p>『四代様(真明氏)の「メシア」についての根拠資料』</p> <p>1. 平成29年新年ご挨拶:四代様は、「主神の創造のみ旨は、ご自身の子をお生みになるこ</p>	<p>① 「メシヤ」とは？</p> <p>四代様は、「主神が私たちを天国で生んだ時(分霊を授けた時)に、その分霊に刻み込まれた名前が『メシヤ』であるとされ、だからこそ、すべての人々は『メシヤ』になるために生まれたのだ」と述べられています。(四代様根拠資料1～3)。言うまでもなく、御教えにも明らかのように、「メシヤ」とは、世界の終末に際し、全人類を救い、病貧争絶無の地上天国を造るべく最高神のご経綸の下に、主脳者としての大任を負わされた、明主様に対する尊称です。それ故に、明主様は、主神から「絶大な救いの力」を与えられた唯一無二の「救世主・メシヤ」なのです。(明主様根拠資料3)。また、四代様が言うような、<u>主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前が「メシヤ」だ</u>という御教えは一つも存在しません。また、四代様は、「主神は、明主様を模範として用意された」と公言されていますが(四代様根拠資料1、2)、上記のように、主神が選ばれた明主様は、人類の模範などというような次元のお方ではなく、すべての権限を主神から授けられ特別なお方なのです。四代様が言われるような「わたしを模範とするように」というような次元のお方ではないのです。当然ながら、四代様が言われるような「主神が明主様を模範として用意された」といった主旨のお言葉は、御教えには存在しません。</p> <p>② 観世音菩薩とメシヤの関係？</p> <p>四代様は、「明主様にとりまして、「観世音菩薩」という御名を始めとする数々の御名は、今や、「メシヤ」という御名に包含され、融合されていると思います」と述べられています(四代様根拠資料1)、私たちは、この言葉を四代様がどのような意図・意味で発言されているのか到底理解することができません。ただ、明確に言えることは、善言讃詞にある「<u>世尊観世音菩薩此土に天降らせ給ひ光明如来と現じ応新弥勒と化し救世主(メシヤ)とならせ給いて一</u>」とは、幾多の御教えから確認されてように、<u>明主様のご神格の高まりを表している</u>のであり、まさに明主様お一方のみに許されたメシヤの尊称であり、「ご神格」であることが分かります。つまり、「観世音菩薩」に始まり、「メシヤ」に至る数々の神仏は、単に名称ではなく、明主様のご修行の道程を表しており、決してこの過程のご神格は単に「包含」「融合」という言葉で消えるようなものではありません。また四代様が主張されるように、「<u>メシヤは明主様だけではなく誰もがなれる</u>」となると、<u>観世音菩薩とメシヤの関係は、不明確なもの</u>になってしまいます。したがって、「観世音菩薩」を始めとする数々の御名は、「メシヤ」という御名に包含され、融合されているということではないことは明らかであります。</p> <p>③ メシヤは誰でもなれるのでしょうか？</p> <p>四代様は、「<u>明主様が天国に立ち返って、主神の命を永遠の命としてお受けになって、主神の子たるメシヤとしてお生まれになった</u>」と述べられています(四代様根拠資料1)、明主様がそのような発言をされたという記録は存在しません。四代様は、『「メシヤ」は主神がすべての始まりの天国において、多数の分霊をお生みになり、それを人間に授けられ、その時に分霊に刻み込まれた名前が『メシヤ』』であると、誰もメシヤになれると述べ(四代様根拠資料7)、御教えにはないご自身が固く信じる独自の思想を説かれています。しかし、前述の如く、世界救世教では、「メシヤ」とは、世界の終末に際し、全人類を救い、病貧争絶無の地上天国を造るべく、最高神のご経綸の下に、主脳神として大任を負わされた明主様唯一一人に授けられた尊称とされています。一方、明主様は「メシヤ」という言葉が使われた理由について、「<u>神の啓示によって「救世教」の名を授かったが、漢字であると東洋に限られるから、どうしても全人類を救うにはそれに相応するような意味を表さなければならない、それが為に救世に「メシヤ」のフリ仮名を付けた。従って、メシヤとは救世の意味だけであって、今後の活動に適合するためのもので他に意味はないので、其の事を茲に断っておくのである。人によってはキリスト教に關係のある名称だから、時局便乗主義からと思ふかも知れないが、そういう点は些かもないのである</u>」と明言されています。(明主様根拠資料2)。さらに、明主様のご神事を辿っていくと、昭和5年6月に主神の代表神であり、最尊最貴の玉一真神である天照皇大御神の分霊「<u>いづのめ神</u>」(救済の権をもつ)が明主様の光の玉に宿られ、昭和25年6月には「<u>天照皇大御神</u>」(統治の権、赦しの権をもつ)が、昭和29年2月には「<u>国常立尊</u>」が現界の審判の権をもって明主様に宿られています。これ以外にも多数の神々が明主様にご降臨されたと記されており。つまり、昭和29年2月の時点で、明主様は、すでにいづのめ神、天照皇大御神、国常立尊を宿されており、これら三柱の神の三位一体の完全な姿である「<u>みろく真神</u>」として、<u>最高の神格、霊格の位を得られ、救世の大任を授けられています</u>。昭和29年6月5日のメシヤ降臨の時に、明主様が「メシヤが生まれた」と言われたのは、明主様が最終的に最高のご神格たるメシヤ(キング・</p>

です。いまに黒髪になりますよ。だから、神様は大いに若返れと、そして仕事をしなきゃならんというわけなんです。それで、今度のことについては、もう奇蹟っていうどころじゃない、奇蹟以上の奇蹟がたくさんあったんですけど、差支えない点だけはだんだん発表します。それで、このメシヤというのは、世界中で最高の位なんです。西洋では王の王ということになっていますが、キングオブキングスと言ってその位をもっているんです。だから、私が出てはじめて人類は救われるのです」と語っておられます。

4. 天国の礎 宗教篇上17～20ページ、昭和27年5月7日:「栄光」第55号: 明主様は、「よく昔から神人合一という言葉があるが、実際から言ってそういう人は、いままで一人もいなかったと私は思っている。なるほど釈迦、キリスト、マホメットの三大聖者にしても、神人合一の如く見ゆるが、実は神意の伝達者であって、判り易く言えば神の取次者であったのである。というわけで世人は神人合一と、神の取次者との区別を知らなかったのである。(中略)いつも言う通り私の腹には光の玉がある。これはある最高の神様の魂であるから、私の言動すべては神様自身が、私を自由自在に動かしているのである。つまり神と人との区別がないわけで、これが真の神人合一なのである。したがって、私に在られます神霊は最高の神位であるから、これ以上の神様は世の中にいないのであるから、他の神様に頭を下げる意味はないので、何よりも信者が日々顕わしている奇蹟がそれを証拠立てている。その奇蹟たるや、キリストの顕わした奇蹟以上の奇蹟が常に顕われているので、私の弟子でもキリストに比べて何等劣る処はないのであるから、この一事だけでも私の神格は想像つく筈である」「今日迄の悉(ことごと)くの聖者は、将来天国の世界が実現すると予言したが、自分自身造るとは言われなかったのは、全く神格が低く、力が足りなかったからである。私は自分自身が病貧争絶無の地上天国を造ると宣言しているのは、右の理由によるからである」とお説きになっています。

5. 昭和27年12月25日「私が神様を拝まぬ理由」、「天国の礎」宗教篇上26～27ページ: 明主様は、ご自身のご神格について「元来私という者は、神格上からいって最高地位にあるので、私より上位の神様はこの世の中にないから、拝むわけにはゆかないのである」と説かれています。

6. 昭和25年11月25日【本教と私】、「天国に礎」宗教篇上51ページ: 明主様は、ご自分のご神格について「私はまた人類史上類例のない不思議な運命をもっている。というのはすでに世界に知れ亘っている大宗教家としての、釈迦や、キリストや、マホメットなどはまったくちがう救世の大使命を行うべく、この世に生まれさせられたのである。というのはそれら偉人のできなかつたことが、私にはできる力を与えられている。勿論これは現実で信者諸君の知る通りである。例えば、まず私は知りたいと思うことは何でも分かる。神幽現三界は元より、過、現、未、に亘って重要なことはことごとく分かるのである。勿論人類を救い、天国を造る範囲内であるのいうまでもない。だから一年先はこうなる、数年先はこうなるという世の中の推移も自分の運命も判るのだから面白いともいえる。しかも今日までの経験によっても大体はその通り実現する。つまり夢が現実化するのである。また私はいろいろなことを常に計画し実行しているが、すべて思い通りになる」と述べられています。

とであります。そのために、私どもの中におられる主神は、すべての創造をお始めになる前に、まず、ご自身の天国を用意され、その天国に於いて、万物の霊と共に、人間となるべき霊、すなわち、ご自身の分霊を、予めお生みになりました。この時、主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前がメシヤである、と私は信じています。(中略)主神が個々別々の自我意識を持つ人間を創造されたのは、万物と一体である私ども一人ひとりを再び天国に迎え入れ、主神の御業を継承し、主神に仕える者、すなわち、主神ご自身の子・メシヤとして新しく生まれさせるためです」(中略)このように、明主様は、観世音菩薩(観音)の本体であり実体がメシヤであることをお示しくされました。私は、明主様にとりまして、『観世音菩薩』という御名を始めとする数々の御名は、今や、「メシヤ」という御名に包含され、融合されていると思います。(中略)そして、六月十五日、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行され、主神の子として新しく生まれるという、例えようもない喜びがあることを私どもにお示しくされました。このメシヤとして新しくお生まれになった明主様が、私ども一人ひとりの中におられるのです。その明主様が今、私どもの中で、“わたしを模範とするように”と訴えていらっしゃるように思えてなりません」と述べられています。**2. 平成28年8月26日「新生」「真善美」掲載「世界救世教とは」及び関連2文書について:** 四代様は、「世界救世教の信徒である私たちは、教祖である岡田茂吉を模範として、神さまの子どもとして新しく生まれることを目指しています。 私たちは地上に生まれた時、この世の両親の子どもとなりましたが、今度は、永遠に生きていらっしゃる神さまの子どもとして、もう一度、新しく生まれなければなりません。私たちがこの世の両親から名前を付けてもらったように、神さまも、私たちを天国でお生みになった時に、私たちに名前を授けてくださいました。私たちは、その名前がメシアであると信じています。すべての人々は、神さまの子ども、つまりメシアとなるためにこの世に生まれてきたのだと私たちは信じています」と述べています

3. 2015年第23回世界ボーイスカウトジャンボリー世界大会、山口で開催での世界救世教の紹介文:

四代様は、「私たちは地上に生まれた時、この世の両親の子供となりましたが、今度は、永遠に生きていらっしゃる神様の子供として、もう一度、新しく生まれなければなりません。私たちがこの世の両親から名前を付けてもらったように、神様も私たちを天国でお生みになった時に、私たちに名前を授けてくださいました。私たちは、その名前がメシヤであると信じています。全ての人々は、神様の子ども、つまりメシヤとなるためにこの世に生まれてきたのだと私たちは信じています」と発言されています。(中略)もし神様が、私たちを天国に迎え入れて下さるならば、私たちは神様の子供、つまりメシヤとして、新しく生まれることが出来ると信じています」とお説きになっています。

4. 平成26年6月30日教主様といづのめ教団海外参拝団代表者との懇親会: 四代様は、「我々は霊界と現界とを分けて考えたり、この世から去ったらどうなるかなどといろいろ考え、また、霊界に関する教えも昔から沢山読んだり聞いたりしていますね。そうした教えは、自我意識という人間性を持たされた我々が、少しでも目に見えない本質の世界に心を向け、神様に心を向けることができるようにと神様が用意して下さった教えだと思います。我々は、そうした教えを自分の狭い理解と認識の中に留めてしまいがちです。我々は、今までのいろいろな教えを通して、我々が神様に心を向けることができるように養い育てて下さっていたことに感謝し、今までの教えを神様から出た教えとして、明主様を通して神様にお返しした方がよいと思います。そうすれば、神様は、我々が始まりの天国において、すでに賜っていた教えを段々と思い出すことができるようにして下さると思います。そして、我々が本当の事を思い出す時は、この世で今までに聞いたことも考えたこともないことのように感じられるかもしれません」と述べられています。

5. 平成28年4月14日第4回真明氏と若手専従者との懇談会: 四代様の意を受けた真明氏は、「普通“メシヤ”っていうと、なんかとてつもなく偉い存在みたいに我々は思うじゃないですか。なんか金の服かなんか着て、生き神様、みたいな。だから、神の子たるメシヤになる、ということは、みんな「なんでも俺の言うことを聞け」みたいな、そんな偉い存在になるのかっていったら、そうじゃないと思うんですね。「神人合一」っていうのがありますよね。明主様はまず神人合一になられて、その後メシヤに、って。それで、神人合一というのは、神と人が一つに合わさっている、っていうことですがけれども、じゃあ改めて思うと、「人」の持っているもので、神様がお造りになっていない部分は一つもないですよ。『人』の存在自身がもう心も思いも身体も、全部神様のものですよ。だから、明主様は、『自分が人と思っていた部分が実は神様のものだったんだな』ということを思われた、ということで、「神人合一」と。だから、むしろ、人間として最も謙虚な姿ですよ。普通我々は真逆の発想で、神人合一というと、明主様が偉くなられた、みたいに思うんだけど、むしろ、明主様は、神様にどンドン謙虚になられたんですよ。(中略)神様に対してそれだけ謙虚であられた明主様であるから、神様は、明主様に「赦し」という権限をお与えになったじゃないですか」と述べています。

6. 平成28年2月24日いづのめ教団・西日本教区信徒大会事後報告(部分): 四代様は、「主

オブ・キングズ)の位に立たれたことを表されたものとされています。(明主様根拠資料3～6)。したがって、四代様が言われるような、明主様が天国に立ち返って、主神の命を永遠の命としてお受けになって、主神の子たるメシヤとしてお生まれになったのではありません。(明主様根拠資料4)これまで世界救世教では、「メシヤ降誕」や「メシヤの神力」を表した時に「救世」という意味で「メシヤ」という言葉が使われたことがあります。それ以外では今日まであまり使われておりません。つまり、四代様の言われる「メシヤ」は、明主様や世界救世教が定める「メシヤ」とは、在り方も意味合いもまったく異なるものです。

④ 他の宗教における「メシヤ」との意味の違い？

「メシヤ」という言葉は、キリストが誕生する前から使われていた言葉で、ユダヤ民族の「ダビデ王朝の王」、広くは「イスラエル民族の政治的・経済的・軍事的指導者」を指しています。しかし、世界救世教におけるメシヤは、ユダヤ教におけるメシヤとはその在り方や意味合いはまったく異なります。「メシヤ」という言葉は、他の宗教においても存在しています。最もよく知られているメシヤは、キリスト教における「メシヤ」で、キリストを指しており、「宗教的・形而上の救い」を求めるものであります。一方、世界救世教における「メシヤ」は明主様であり、「形而下から形而上まで、現世から来世までの救い」を求めるものであります。こうした観点で見ると、四代様の説かれる「メシヤ」は、キリスト教における「宗教的・形而上の救い」を指向するものに似ていますが、世界救世教における「メシヤ」とは明らかに異なっていることが分かります。

⑤ 「メシヤ」はとてつもなく偉い存在ではないのか？

真明氏は、「“メシヤ”っていうと、なんかとてつもなく偉い存在みたいに我々は思うじゃないですか。しかし、そうじゃないと思うんですね」と述べていますが(四代様根拠資料5、12)、前述のような明主様のご神事を辿ってみれば、その言葉がいかに的外れの言葉であるかが分かります。「メシヤ」と「人間」は、まさに「救う」と「救われる」という関係にあって、四代様や真明氏が言われるような「メシヤは誰でもなれる」(四代様根拠資料3、9、11、13)というような軽々しいものではなく、とてつもなく偉い存在」なのです。

⑥ 真の「神人合一」とは？

明主様は、「私の腹には光の玉がある。これはある最高の神様の魂であるから、私の言動すべては神様自身が、私を自由自在に動かしているのである。つまり神と人との区別がないわけで、これが真の神人合一なのである」と明言され(明主様根拠資料4)、「私に在られます神霊は最高の神位であるから、これ以上の神様は世の中にいないのであるから、他の神様に頭を下げる意味はないので、何よりも信者が日々顕わしている奇蹟がそれを証拠立てておられます。その奇蹟たるや、キリストの顕わした奇蹟以上の奇蹟が常に顕われているので、私の弟子でもキリストに比べて何等劣る処はないのであるから、この一事だけでも私の神格は想像つく筈である」「今日迄の悉(ことごと)くの聖者は、将来天国的世界が実現すると予言したが、自分自身造るとは言われなかったのは、全く神格が低く、力が足りなかつたからである。私は自分自身が病貧争絶無の地上天国を造ると宣言しているのは、右の理由によるからである」とお説きになっています。(明主様根拠資料3)、一方、四代様の意を汲んだ真明氏は、「普通、我々は真逆の発想で、神人合一というと、明主様が偉くなられた、みたいに思うんだけど、むしろ、明主様は、神様にどンドン謙虚になられた」(四代様根拠資料4)、「人の持っているもので、神がお造りになっていない部分は一つもないですよね。『人』の存在自身がもう心も思いも身体も全部神様のもの」という意味で『神人合一』です」と述べています。(四代様根拠資料5、12)これは、驚愕の発言以外の何ものでもありません。真明氏が言うような。真明氏の発言は、明らかに明主様を蔑ろにし貶める発言と思われれます。また、真明氏は「神様に対してそれだけ謙虚であられた明主様であるから、神様は、明主様に「赦し」という権限をお与えになったじゃないですか」とも発言しておられます。また、真明氏の言う神様を天照皇大神と解釈すれば、天照皇大神は天上の神様ゆえ、地上の人格神である天照大御神(昭和25年6月5日憑依)、伊都能売大神(昭和5年6月1日憑依)、国常立神(昭和29年2月4日憑依)を明主様に降臨させて、権限を委ねられており、「赦し」という権限だけをお与えになったのではないことは明白です。

真明氏は、「明主様はまず神人合一になられて、その後メシヤになられた、っていうことですがけれども、「人」の持っているもので、神様がお造りになっていない部分は一つもないですよ。ね。だから、明主様は、自分が人と思っていた部分が実は神様のものだったんだな、ということを思われた。ということで、『神人合一』と。だから、むしろ、人間として最も謙虚な姿ですよ。ね。」と述べられています。(四代様根拠資料5)。また、別の機会には、『『神人合一』っていうことは、神と人が合わさって一つになる、ということですが、よく考えると、じゃあ我々『人』の中で、神様のお造りになっていない部分はあるのかなど。我々の心とか、思いとか、魂とか、そういうものを我々造れますかね。当然造れないですよ。ね。というか葉っぱ一枚ですら造れない。ということは、「人」と言われている部分は、すべて神様がお造りになったものですよ。ね。だから、『ああ、自分の力で生きているように思っていたけれども、なんだ全部神様のお力だったんだな』ということを本当に認めることができれば、誰でも『神人合一』とい

神ご自身の思いに我々が気づき、あるいは、それを思い出すための手掛かり、取っ掛かりとして表現して下さったのが明主様の御教えだと思います。私は、どうしても自分の役目は、明主様が我々に気づいてほしいと強く願ってらっしゃる大切なこと、それは、明主様をお遣わしになった主神の思いだと思いますが、その思いについて、私を感じさ

せていただいたことを、私の胸に留めるだけじゃなくて、皆さんにお伝えしなきゃいけない役目があるんだと思ってるんですね。それだけなんですよ、もう。私の考えをお伝えするというよりも、これが明主様の思い、明主様の御教えだと、私を感じたことをお伝えするしかないんですね、他に何もありません」と述べられています。

7. 平成28年2月22日第2回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 四代様の意を受けた真明氏は、「昭和29年6月5日、明主様は『メシヤが生まれた』『新しく生まれた』と。そして、その時に、『生まれ変わるのではない』とおっしゃった。『生まれ変わるのではない』ですよ。これはもう、大どんでん返しですよ。だって、それまでの明主様の御教えは生まれ変わりを前提にしてほとんど説かれていますよね。霊層界に関する御教えもそうですよね。昭和29年6月5日の時、明主様は、『私も驚いたんです』と。ということは、それまでご自分が説かれたことも含めて、本当に、『ああ、全然違ったんだ、思い違いをしてたんだ、これなんだな』と、全く新しい気持ちで、神様からの新しい御教えを明主様は受けられたと思うんですよ」と述べられています。

8. 平成29年12月22日熱海後楽園でのお言葉: 四代様は、「私の言葉について、明主様のみ教えと違うとか、受け入れられないとか仰る方がいらっしゃいますけれども、それは、ある意味では、当然のことだなあと思います。今までの、人間を主体としてみ教えの理解をしていくと、自分の受けとめ方を主体に考えていくと、どうしても、そのような私の言葉との矛盾というものを感じてしまうことがあると思うんですね」と述べられています。

9. 平成28年2月22日第2回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 真明氏は、「“メシヤ”とか“神人合一”っていうのは、本当に特別な、高い存在、ということを我々思いますよね。例えば、“神人合一”っていうことは、神と人が合わさって一つになる、ということですけど、よく考えてみると、じゃあ我々“人”の中で、神様のお造りになっていない部分があるのかな。(中略)だから、『あゝ、自分の力で生きてるように思っていたけど、なんだ全部神様のお力だったんだな』ということを本当に認めることができれば、誰でも、神人合一になれますよね」と述べられています。

10. 平成28年2月22日第2回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 真明氏は、「神様が我々一人ひとりの中にいらっしゃると確信もついていると思います。そして、その本物の神様が、我々を神様の子供として、『メシヤ明主様』『メシヤ岡田茂吉』というように、我々にも『メシヤ誰々』という名前をそれぞれくださろうとしているんです。そういうふうになられたお方は、我々にとって明主様がひな形ですから、やはり、そのお方にならってその道を命がけで歩む」と述べられています。

11. 平成28年4月14日第4回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 真明氏は、「我々も、一人ひとりが分霊をもたらされているって、明主様おっしゃってますよね。本守護神なども仰っていますけれども、その分霊とか本守護神にも、やっぱり、『メシヤ』って名前が付いているんですよ、本当は。だから我々も、『メシヤ・何とか』って名前をいただけるんですよ、明主様のように。明主様をお受けするお受けするって、簡単にできそうですね」と述べられています。

12. 平成28年4月14日第4回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 真明氏は、「普通、『メシヤ』って言うと、何かとてつもなく偉い存在みたいじゃありませんか。なんか金の服なんか着て、生き神様みたいな。だから、みんな、なんでも俺の言う事を聞け、みたいなそんな偉い存在になるのかっていったら、そうじゃないとおもうんですね」「『メシヤ』ということば出ちゃうと、何か、突然自分がすごい存在にならないといけない、大丈夫なのか、となってしまうのではなく、明主様の謙虚さ、神様にお仕える、という人間としての基本の基本を、明主様は『メシヤ』とか『神人合一』とか、そういうお言葉で表現されたと思うんですよ。明主様は、謙虚さ、とか、神様に対しての恐れ多さというのは根本的におありになられたと思うんですよ」と述べておられます。

13. 平成28年3月18日第3回 岡田真明様と若手専従者との懇談会: 真明氏は、「今までは、どこか『神の為』と思っけていても、やはり『人の為』に必死になってやってきた。そこがやはり古かったんだと思いますよね。だから、またこれからも古い在り方を続けていってしまうのではなくて、まず『メシヤを継承します』と色々する前にそのように自分自身の中で一番最初に定めるんですよ」と述べられています。

14. 平成28年9月28日: 四代様は、「『我々がメシヤだとすると、我々一人ひとりも救し主になるのですか』という質問がありましたが、一ことで言う『そうなんです』と述べられています。

う姿になれますよね」と語っています。(四代様根拠資料5、9)。真明氏の「神と人が合わさって一つになる」とか、「神様を認識すれば、誰でも神人合一の姿になる」とは、随分乱暴な発言だと思います。同様の趣旨の発言は、四代様も限られた人たちとの懇談会で述べられています。例えば、「『神人合一』についてですけど、自分が存在していることは、自分の中に神様が存在しているということですよ。本当は、神様なしでは自分は存在し得ない。見たり、聞いたり、感じたり、考えたりするのは、自分の力ではない、神様の力。神様は、ご自身の意識を我々一人ひとりにのもののようにさせて下さって、自我意識と言われる個性ある人間性を創って下さいました。そのことに本当に気づいて、今まで自分のものとしていた意識を神様のものとして認め、お返し申し上げ、神様の意識と一つにならせていただくことが『神人合一』だと思います」と述べられています。こうした四代様や真明氏が述べられる「神人合一」という言葉の意味合いや在り方は、明主様の説かれる「神人合一」とは、大きくかけ離れたものであります。

⑦ 四代様が「メシヤ」の御名を奉唱させる意味は？

明主様がご立教の際に発刊された雑誌「光明世界」創刊号の巻頭言には、「神は光にして光のあるところ、平和と幸福と歓喜あり、無明暗黒には闘争と欠乏と病あり、光と栄えを欲する者は来たれ、来たりて一観世音菩薩の御名を奉称せよ、さらば救われん」と記されています。四代様は、この「観世音菩薩の御名を奉称せよ、さらば救われん」のお言葉を「メシヤの御名を奉称せよ、さらば救われん」と変更され(平成27年1月1日新年ご挨拶)、最近発刊された「いづのめだより」No.3では、この変更された四代様のお言葉に「光の言葉」というタイトルをつけておられます。四代様は、「主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前がメシヤである」(四代様根拠資料1)と述べられておられることから、「メシヤの御名」は「分霊の名前」ということになります。四代様の言われることをそのまま解釈すれば、「自分が、自分の名前を奉称すれば救われる」ことになり、甚だ可笑しい論理になってしまいます。明主様は「自分の名前を奉称せよ」などと言った非論理的なことをお説きになってはおられません。自分の名前を奉称して救われるはずもありませんから。メシヤの御名を奉称するのは、どこまでも明主様の裡なるメシヤというご神格に対してなされるものであると考えます。仮に、どうしても変更しようとするのであれば、誤解を生じさせないためにも、「明主様の御名を奉称せよ、さらば救われん」とすべきだと思います。

⑧ 明主様は、「メシヤ」が生まれたと述べられているにも関わらず、四代様はなぜ「主神の子」と置き換える必要があるのでしょうか。メシヤ＝主神の子と定義づけることによって、「誰もがメシヤになれる」「明主様はその範例」との独自の理論に結び付けているように思われます。繰り返しになりますが、私どもは、明主様の「メシヤが生まれた」とのお言葉は、唯一無二の救世主として、明主様がこの世に遣わされたことを表したものと理解しています。つまり、『東方之光』(下巻p657-658)に示されているように、明主様が「救世主出現の事実を、世の内外に示し、自身が救世主としてこの世につかわされたことを明らかにされた」と私たちは受け止めています。「メシヤ降誕仮祝典」で、はじめて「天照皇大神様のご神名をもって祝詞が奏上されたのも、まさに最高のご神格を持たれた救世主・メシヤの誕生を表している証しだと信じています。

⑨ 「メシヤ」という言葉が頻発される真意は？

四代様が使われている「メシヤ」という言葉が、最近の救世教(とくに教主中心の信仰を掲げるグループ)において「新しい信仰」のキーワードになっており、メシヤ」という言葉を発しない者は、「反教主」であるとさえ喧伝されています。しかし、教団の歴史を見ると、昭和29年6月15日のメシヤ降誕仮祝典において「明主様」を「メシヤ様」と尊称することが告げられましたが、その後2カ月足らずで、「メシヤ」の尊称を元の「明主様」に戻すことになった旨通達されています(昭和29年8月11号「栄光」誌)。その後、「世界メシヤ教」を「世界救世教」に、「メシヤ会館」を「救世会館」に改められ、それらの名称で今日に至っております。こうした状況があるにもかかわらず、明主様が取り下げられた「メシヤ」をあえて復活させ、「私たちは、その名前がメシヤであり、すべての人は神様の子供、つまりメシヤとなるために生まれてきたと信じています」等々、四代様が「メシヤ」を強く打ち出す本意図はどこにあるのでしょうか。明主様の信徒として一人ひとりが深く吟味すべきことと考えます。また、「メシヤ」という言葉についても、世界救世教でいうメシヤと他の宗教で言われるメシヤとは明確に異なっています。元々「メシヤ」はユダヤ民族を精神的救い(神への贖い)と同時に政治的・軍事的に救ってくれる神の子、王を指しています。(脚注1)。キリスト教におけるメシヤはキリストを指しており、この世の政治的・社会的出来事に関心をもち、どこまでも「宗教的・形而上の救い」を求めるものであります。しかし、世界救世教における「メシヤ」は明主様であり、「形而下から形而上まで」、つまり「現世から来世までの救い」を推し進めておられるものであります。こうした観点で見ますと、四代様の説かれている「メシヤ」は、キリスト教における「宗教的・形而上の救い」を指向するものに似ており、世界救世教における「メシヤ」とは明らかに異なっていると考えられます。

参考1:「メシヤ」の意味

世界救世教のメシヤ:救い主(国常立尊神)

ユダヤ教(民族宗教):ユダヤの民を経済的、軍事的に救ってくれる神の子(王)

キリスト教:キリストは救い主、イエスは贖い主

参考2:「メシヤ」という言葉は、キリストが誕生する前から使われていた言葉で、ユダヤ民族の「ダビデ王朝の王」、広くは「イスラエル民族の政治的・経済的・軍事的指導者」を指しています。この「政治的・軍事的指導者」の側面を強く意識していたのが、オウム真理教の

麻原彰晃であり、麻原が「メシヤ宣言」をして、旧ソ連軍の軍用ヘリコプターを購入したり、サリンの製造等々に励んでいたことは、日本人はよく知っています。

参考3: 1995年、フランスにおいて「カルト法」が成立しました。ある集団をカルト指定する要件として、強い「終末思想」と「メシヤ思想」を持つことを掲げています。これは、麻原のような連中がテロ組織を結成する危険性を強く感じていたからです。フランスの危機意識は、EU諸国においても共有され、一般市民の常識ともなっています。

【「利他行・利他愛」について】

明主様のご神書(御教え・教典・岡田茂吉全集)	四代教主様のお言葉	いづのめ教団対策本部事務局としての見解と根拠
<p>『御教えの要旨』</p> <p>① 明主様は、「他人を幸福にする為に努力する事こそ、自分自身を幸福にする絶対的条件である」「他人を幸福にする利他的観念を植付けることが、千古を貫く真理であり、キリスト教の愛や仏教の慈悲にも通じる普遍の心言行である」と諭されています。(根拠資料1)</p> <p>② 明主様は、「人を幸福にしなければ、自分は幸福になり得ない」と常に考えられ、「他人を幸福にすること」「できるだけ善事を行うこと」を説かれ、それが病貧争絶無の地上天国建設の働きとなり、人々の幸福につながると説かれています。(根拠資料2、3)</p> <p>③ 明主様は、『利他愛』は、一人の人間が一生かけても成し遂げられない慈悲愛のことで、人間はどれ程頑張っても到達し得ないからこそ、大切なことなのだ」と、御教えの中で「利他愛」を繰り返し説かれています。さらに明主様は、『幸福』は人間の不変の希求であり、『幸福』のためには、『他人』を幸福にすることだ、と具体例を挙げて説いておられます。(根拠資料4)</p> <p>④ 明主様は、「利他行・利他愛」の実践について、「小乗でも駄目、大乘でも駄目だ」という事は明らかであります。然らば、一体どうすることが本当なのかと言えば、それは小乗にもあらず大乘にもあらず、また小乗であった大乘であるということであり、それは或る場合は小乗で行き、或る場合は大乘で行く、その時と、場合、又人によって種々に変化する事でもあります」と述べられ、「すなわち大乘にして小乗、小乗にして大乘にあらねばならない。そのように結んだ真ん中が伊都能売(いづのめ)という観音様のお働きになる」と説かれています。(根拠資料5、6)</p> <p>『明主様の「利他行・利他愛」についての根拠資料』</p> <p>1. 昭和23年12月1日「地上天国」創刊号、「天国の礎」宗教篇下37ページ: 明主様は、「昔から言う処の善因善果、悪因悪果とは実に千古を貫く真理である。此理を知って他人を幸福にする為に努力する事こそ、自分自身を幸福にする絶対的条件であらねばならない。(中略)宗教が人間にとって如何に必要であるかは此点にあるのである。即ちキリスト教の愛と、いい仏教の慈悲というのも他人を幸福にする利他的観念を植付けるのが本義である。此様な簡単な道理も人間はなかなか認識し難いものである。そこで神様や仏様は種々の教義を作り、心言行の規準を示し、見えざるものの存在を教え、取次者をして誠心誠意信仰に導くのである」と説かれています。(根拠資料1)</p> <p>2. 昭和25年1月30日「自観叢書」12篇、「天国の礎」宗教篇下39頁: 明主様は、「私は若い頃から人を喜ばせることが好きで、ほとんど道楽のようになっている。私は常にいかにしたらみんなが幸福になるかということを考えている」「私は『人を幸福にしなければ、自分は幸福になり得ない』と常に言うのである」「私の最大目標である地上天国とは、この私の心が共通し拡大されることとと思っている」と述べられています。</p> <p>3. 昭和24年10月1日「幸福の秘訣」、「天国の礎」宗教篇下43～44ページ: 明主様は、「その方法はといえば常に吾々のいう、他人を幸福にすること」「できるだけ善事を行うのである。始終間さえあればなにか善いことをしようと心がけるのである」「みんなが気を揃えて善事を行ったとしたら、国家も社会もどうなるであろうかを想像してみるがいい。まず世界一の理想国家となり、世界中から尊敬を受けるのは勿論である。その結果あらゆる忌まわしい問題は解消し吾らが唱える病貧争絶無の地上天国は出現し人民の幸福は計り知れない」と説かれています。</p> <p>4. 昭和24年10月1日「幸福の秘訣」: 明主様は、「右を先ず簡単に言えば、できるだけ善事を行うのである、終始間(ひま)さえあれば何か善い事をしようと心掛けるのである。例えば人を喜ばせよう、世の中の為になら妻は夫を気持ちよく働かせるようにし、夫は妻を親切にし安心させ喜ばせるようにする、親は子愛するの当然だが、叡智を働かせて子供の将来を思い、封建的でなく、子供は親に快く心服し、愉快に勉強させるようにする、其他日常生活の場合相手に希望を持たせるようにし、上役に対しても下役に對しても愛と親切とを旨とし出来る限り誠を尽くすのである。政治家は自分のことを棚上げにして国民の幸福を第一とし凡て模範を示すようにする、勿論、一般人も一生懸命善事を行うことに努め叡智を揮い、努力するのである、斯様に善事を多くした人程幸福者になることは受合である。」、と述べられています。</p> <p>5. 昭和10年1月1日、ご立教教会式挨拶「大光明建設」: 明主様は、「それで小乗でも駄目、大乘でも駄目だ」という事は明らかであります。然らば、一体どうすることが本当なのかと言えば、それは小乗にもあらず大乘にもあらず、また小乗であった大乘であるということであり</p>	<p>『お言葉の要旨』</p> <p>① 四代様は、「明主様のお説きになった利他愛の御教えも、すべてを赦してくださった主神にお仕えする信仰を養って頂くための御教えであると思います」「どんなに心を尽くしても、人間である以上、他人のことを常に思いやり、その人の幸せを常に思いやり、その人の幸せを心から願うことは、大変難しいことである」「しかしながら、そうした私どもの至らなさを赦してくださったのは、主神なのではないでしょうか」と述べ、「利他愛も利他行も主神にお仕えする信仰を養って頂くためのものだと主張されています。(根拠資料1)</p> <p>② 四代様や真明氏は、「人の喜びが神様の喜びになるということ」を否定し、「これまでの私たちの徳積みや利他行が間違っていたのではないかと」語っておられます。(根拠資料2～4)</p> <p>③ 真明氏は、青年プロジェクトチームとの懇談会の場において、利他愛を、「世の中で軽々しく言っている程度のこと」とし、「我々が一生かけるべきことなのか」と疑問を投げかけられています。(根拠資料5)</p> <p>④ 平成28年5月19日付、「明主様は御教え『正愛と邪愛』」: 四代様は、「明主様は御教え『正愛と邪愛』の中で、『家庭愛や周囲愛は小乗愛で利己愛の部に属する』とお説きになりました。また御教え『大乘愛』において、そのような周囲愛である小乗愛は、『何程熱烈な愛でも、結局に於いて悪』であり、『何程立派な理屈を唱えても、小乗愛は限られた愛であるから危険』であり、それが戦争の原因であると御教え下さっております。私たちの周囲、ということとは私たちの身近な世界ということになりますが、その人たちを愛するのは、いかに強い思いがあり、いかに立派な理屈があっても、詰まるところ悪である、と厳しく周囲愛というものについて戒めておられます。いづのめ教団においては、そのような身の回りの人を大切にし、それを行動に移していく、『利他行』『利他愛』の実践が大切だということを盛んに訴えられています。明主様は、そのような利他の信仰について、昭和10年、ご立教一番最初の発会式の中で、大乘と言われる利他の信仰について触れられ、以下のようにお述べになっておられます。『こういう信仰や、こういうやり方で、各時代に大勢の人が、散々やってきたのでありますが、今日まで理想世界が実現しなかったということは、駄目だということ明らかに証明しております』と、家庭愛、周囲愛を基本とする利他愛では『駄目だ』と厳しくお説きくださっております」と述べられ、いづのめ教団の平成27年9月7日『新生』402号2頁掲載の記事でも、「私達の周囲も身近な世界であり、そこで相手の幸せを願う利他の心で『会う・聞く・浄霊する』こともまた世界布教なのです」の述べていることや、平成27年8月8日『新生』401号1頁の大見出しの「身近な人の思いを大切に」と書かれていることを、明主様の御教えをもとにすれば、悪とみなされるであろう在り方を訴えられているのは、明主様の御教えとは違うのではないのでしょうか」と否定的な発言をされています。(根拠資料6)</p> <p>『四代様の「利他行・利他愛」についての根拠資料』</p> <p>1. 平成26年12月御生誕祭: 四代様は、「明主様のお説きになった利他愛の御教えも、すべてを赦してくださった主神にお仕えする信仰を養って頂くための御教えであると思います。私どもは、どんなに心を尽くしても、人間である以上、他人のことを常に思いやり、その人の幸せを常に思いやり、その人の幸せを心から願うことは、大変難しいことでもあります。しかしながら、そうした私どもの至らなさを赦してくださったのは、主神なのではないでしょうか」と述べておられます。</p> <p>2. 平成 28 年 3 月 18 日 第 2 回岡田真明氏と青年プロジェクトチームとの懇談会: 四代様の意を汲んだ真明氏は、「1935 年元旦のご立教の時の一番最初の言葉で、世の中で言っている利他行なんていうことは大勢の人が散々やってきたんだ、でもそれでも地上天国は出来なかったんだ、利他行はダメなんだと、そういう趣旨のことを明主様は明確におっしゃっていますよね。これ、本当はとっても厳しいお言葉であり、御教えですよ。そういう御教えを我々ずっと無視してきたけれども、そうはいかないのではないですか」と述べられています。</p> <p>3. 平成 28 年 4 月 14 日 第 3 回岡田真明氏と若手専従者との懇談会: 四代様の意を汲んだ真明氏は、「明主様の御教えを拝見させて頂くと、明主様のおっしゃっている利他愛というのは、『身の周りの人を幸せにする』という意味ではないんですね。私も、そのような意味だっただけで勘違いしていたのですが、明主様がおっしゃっているのは、実は違うんですね。違うところか、正反対なんですか」と述べられています。さらに真明氏は、「今まで我々が説いてきた利他愛は、明主様がおっしゃってる利他愛とは根本的に違うんだけど、そういう我</p>	<p>① 四代様は、明主様の説かれる「利他愛・利他行」は「主神にお仕えする信仰」だ、と述べられていますが(四代様根拠資料1)、明主様の説かれている「利他愛・利他行」とは意味合いが明らかに異なるように思われます。明主様は「人を喜ばせること」「相手に希望を持たせること」「出来る限り誠を尽くして他人を幸福にするために努力すること」「他人を幸福にする利他的観念を植え付けること」こそが、自分自身を幸福にする絶対的条件であり、このことこそが千古を貫く真理であると諭されています。(明主様根拠資料1)。つまり、明主様は、「人を幸福にしなければ、自分は幸福になり得ない」「他人を幸福にすること」「できるだけ善事を行うこと」、それが病貧争絶無の地上天国建設の働きとなり、人々の幸福につながると説かれています。(明主様根拠資料2、3)。明主様のこのような御教えを戴いているからこそ私たちは日々「利他愛・利他行」の御神業に勤しんでいるのです。浄化者がであれば、昼夜を問わず出かけて行って、浄霊をお取り次ぎする、あるいは、家族や親族以上のお世話をして頂く、これは打算でも理屈でもありません。つまり、「利他愛の実践」は無償の愛の行為なのです。四代様が説かれるような、「明主様の“利他”は、主神にお仕えする信仰”を養うため”のものだとする主張とは明らかに異なっています。明主様は人間中心の利他愛を説かれているのに対し、四代様は御教えとは異なる神様中心の利他愛を説かれているのです。</p> <p>② 四代様は、「人の為に努力するという発想が、いかに神様をないがしろにしてきたのか、それは人間主体、つまり体主霊従の古い営みであった」と述べられています。(四代様根拠資料2)。また、四代様は「進歩向上や修養、徳積みや利他などの名のもとに、主神のものである価値や徳を自分のものとして努力してきたのではないかと」「人間の喜び、楽しみが、主神の喜び、楽しみであると勘違いしていたのではないかと」述べ、これまでの徳積みや利他行が間違っていたのではないかと述べられています。(四代様根拠資料2～4)。しかし、明主様はこのようなことをまったくお説きにはなっておられません。仮に、信徒が四代様のこの発言を知ったら、今まで御教えのもとで「利他愛・利他行」のご神業に勤しんできたことは一体何だったのかと落胆してしまうのではないのでしょうか。信徒は惟神の道にありながらも現当利益を求め、自分が幸福になるために他人の幸せを願う、何かの役に立つ、それが御教えにある利他愛だと信じているのです。四代様が言われる神様の為の利他愛とは何なのか、そのような形而上的な教えだけでは人間は幸せになれないのではないのでしょうか。</p> <p>③ 四代様の意を汲んだ真明氏は、明主様の御教えされた利他愛について、「世の中で軽々しく言っている程度のこと」「我々が一生かけるべきことなのか」と発言されています。(四代様根拠資料5)。しかし、明主様は、「利他愛は一人の人間が一生かけても成し遂げられない慈悲愛のことであり、人間はどれ程頑張っても到達し得ないことなのだ」と考えられておられたからこそ、御教えの中で「利他愛」を繰り返し説かれているのだと思います。「幸福」は人間の不変の希求であり、「幸福」のためには、「他人」を幸福にすることだと明主様は明言されています。真明氏が確たる根拠もなく御教えを否定し、明主様を蔑ろにするような発言をされるようなことは厳に慎むべきものと考えます。</p> <p>④ 真明氏は、「明主様のおっしゃっている利他愛というのは、『身の周りの人を幸せにする』という意味ではないんですね。私も、そのような意味だっただけで勘違いしていたのですが、明主様がおっしゃってるのは、実は違うんですね。違うところか、正反対なんですか」と述べ(平成28年3月18日)、さらには「教主様は一度たりとも、人間の目的は、『人の役に立つことだ』と言われたことはないんですね。むしろ教主様は、『人間の使命は人の役に立つことだ』という世界は古いんだから、そこから一日も早く脱しなさい」と、そういうことに気づいて欲しいと願っていらっしゃると思うんですね」と語っています。(四代様根拠資料3)。しかし、明主様は、このようなことを全くお説きになっていません。四代様の主張は、「古い信仰」「新しい信仰」の項で述べたように、「明主様は昭和29年6月に新しく生まれられ、それ以前の明主様は古い明主様で古い御教えを説かれていたが、その教えも古く間違っていた」とする四代様独自の解釈に基づき発言と推察されます。つまり、自分が幸福になるためには、まず他人を幸せにしなさい、という利他愛の教えは古いので捨て去り、これからは神のために人に尽くすというのが新しい教えなのだ」という論理に繋がっているのです。明主様の説かれる「利他愛」によって幸福を得た者は、そのことによって神の存在を知り、信仰を深化させていくのです。なにも最初から神様のために、と大上段に構える必要はないのです。</p> <p>⑤ 四代様の平成28年5月19日付のいづのめ教団に対する反論は(四代様根拠資料6)、1935年の明主様の発言の全体を読んでみれば、四代様の解釈は必ずしも正確ではなく、自</p>

す。それは或る場合は小乗で行き、或る場合は大乘で行く、その時と、場合、又人によって種々に変化する事であります。(中略)それですから、小乗的信仰利己的信仰では、到底人類は救われない筈で、利己が衝突して争いとなり、それが大きくなれば戦争となるのであります。と、言って大乘的信仰の一身を犠牲にしても世界人類の為に尽くすということは一寸間違っていないように見えますが、こういう信仰や、こういうやり方で各時代の多勢の人が散々やってきたのであります。今まで理想世界が実現しなかったということは、駄目だという事を明らかに証明しております。従って、個人の利益のみ主とする小乗的信仰も間違っておれば、個人を犠牲にする大乘的信仰も間違っているんであります。つまり、両方とも良くなり、全体が救われなければならないのであります」と説かれています。

6. 昭和25年12月6日、「栄光」81号、「天国の礎」宗教篇下120-121ページ:明主様は、「すなわち大乘にして小乗、小乗にして大乘にあらねばならない。そのように結んだ真ん中が伊都能売(いづのめ)という観音様のお働きになる」と説かれています。

々が思い込んでいる『利他愛』とか『人間的な修養』ということを持ち出す、と云う世界から我々はなかなか離れることはできない。(中略)だから、教主様がお説きになっていることは、やはり人間中心の思いでいこうとすると、拒否したい、ということになると思うんです」と述べられています。(中略)さらに、「教主様は、一度たりとも、人間の目的は、『人の役に立つことだ』と言われたことはないんですね。むしろ教主様は、『 ” 人間の使命は人の役に立つことだ” という世界は古いんだから、そこから一日も早く脱しなさい』と、そういうことに気づいて欲しいと願っていらっしやると思うんです」と語っています。一方、四代様も、別の場において、「僕が人のためから神のためと言っているのは、人の喜びが神様の喜びになるということでは全くないですよ。むしろ正反対です。そこを脱してほしいですよ。人のために尽くして下さるか、人の喜びのために尽くして下さる、という言葉が、いかに神様をないがしろにしているものか、一人でも気づいてほしいと、そういうことを私はこういう立場を通して毎回訴えているんですよ」と同様の発言をされています。

4. 平成28年8月1-2日 いづのめ教団・世界平和祈願祭・祖霊大祭:四代様は、「私どもは、今日まで、進歩向上や修養、徳積みや利他などの名のもとに、主神のものである価値や徳を自分のものとし、主神の愛さえも自分のものとし、自分を価値あるもの、徳あるもの、愛あるものとするために努力してきたのではないのでしょうか。また、人間の幸福という名のもとに、主神の喜び、楽しみを願うよりも、人間の喜び、楽しみを願って生きてきたのではないのでしょうか。人間の喜び、楽しみが、主神の喜び、楽しみであると勘違いしていたのではないのでしょうか」と、私たちのこれまでの徳積みや利他行が間違っていたのではないかと述べておられます。

5. 平成27年12月10日真明氏と青年プロジェクトチームとの懇談会:四代様の意を受けた真明氏は、「世の中で軽々しく言っている程度のこと(利他愛)が、我々が一生かけるべきことなのか。」と発言されています。

6. 平成28年5月19日付「ボーイスカウトの文章が御教えと違う」「御教えにはない」ということに対する反論:四代様は、「いづのめ教団においては、そのような身の回りの人を大切に、それを行動に移していく、『利他行』『利他愛の実践』が大切だ、ということを盛んに訴えられておられますが、明主様は、そのような利他の信仰について、昭和10年、ご立教一番最初の発会式の中で、大乘と言われる利他の信仰について触れられ、以下のようにお述べになっておられます。『こういう信仰や、こういうやり方で、各時代の多勢の人が散々やってきたのであります。今日迄理想世界が実現しなかったということは、駄目だということを明らかに証明しております』と、家庭愛、周囲愛を基本とする利他愛では駄目だと厳しくお説きになっています。それを踏まえて、いづのめ教団『新生』の記事を見ますと、(平成27年8月8日401号、1-2ページ)(中略)明主様の御教えをもとにすれば、悪とみなされるであろう在り方(注:「私たちの周囲も身近な世界であり、そこで相手の幸せを願う利他の心で“会う・聞く・浄霊する”ことも世界布教なのです」)を訴えられておられるとすると、このような方向は、明主様の御教えとは違うのではないのでしょうか。そして、先程も述べたように、いづのめ教団に於いては、周囲愛の基本とした利他行、利他愛の実践も強く打ち出しておられるように思いますが、それも明主様の御教えとは違うのではないのでしょうか」と語られています。

己の主張に沿った箇所だけを引用していると思われる。ここで明主様が述べられたことは、「小乗であり大乘であり、小乗でなく大乘でなく、所謂“いづのめ”精神でいく」ということであり、これに関連して説かれた下記の箇所がポイントであると考えます。すなわち、第一に、「それで小乗でも駄目、大乘でも駄目だという事は明らかであります。然らば、一体どうすることが本当なのかと言えば、それは小乗にもあらず大乘にもあらず、また小乗であり大乘であるということでもあります。それは或る場合は小乗で行き、或る場合は大乘で行く、その時と、場合、又人によって種々に変化する事であります。(中略)それですから、小乗的信仰利己的信仰では、到底人類は救われない筈で、利己が衝突して争いとなり、それが大きくなれば戦争となるのであります。と、言って大乘的信仰の一身を犠牲にしても世界人類の為に尽くすということは一寸間違っていないように見えますが、こういう信仰や、こういうやり方で各時代の多勢の人が散々やってきたのであります。今まで理想世界が実現しなかったということは、駄目だという事を明らかに証明しております」と述べられ、続いて、「従って、個人の利益のみ主とする小乗的信仰も間違っておれば、個人を犠牲にする大乘的信仰も間違っているんであります。つまり、両方とも良くなり、全体が救われなければならないのであります」と述べられています。(明主様根拠資料6)。従って、この全体文を見れば、四代様が主張されるような、明主様が利他行・利他愛を間違っていたと否定されたとの結論にはならないことは明白であると思われる。四代様が、ご自分の主張に都合の良い部分だけを切り取って恣意的な主張をされることは、「教主の座」という重い立場におられることを考えれば、誠に慎まなければならないことであると考えます。

⑥ 明主様が一貫して説かれている「利他行」は、一般的にいう道徳ではなく、真理の教えそのものの実践であり、この「利他行」こそ、最終的に、病貧争絶無の地上天国の出現のために不可欠な御神業実践であります。「利他愛」は人間が一生かけても成し遂げられない、人間の本源的な営みです。人間がどれほど頑張っても到達し得ないからこそ、明主様は御教えの中でくどい程「利他愛」を説かれておられるのだと思います。四代様や真明氏は、最初に「神のため」ありき、という前提に立って、「人の為」すなわち「利他行」を否定し、それは「古い」とまで断言されています。そもそも、明主様の御教えは、最高の見真実に立たれた明主様が、過去・現在・未来を見通し説き明かされた絶対の真理である。従って、御教えに「新しい」とか「古い」という概念はあてはまらないものと考えます。

監修：山本健二
作成：世界救世教いづのめ教団
対策本部事務局

413-8585 静岡県熱海市桃山町26-1
電話 0557-85-3171
FAX 0557-85-3173